

Table of Contents - 目次

Type 30 Infantry Rifle.....	Page 03
Type 38 Infantry Rifle, Early Production	Page 04
Type 99 Short Rifle, Early Production	Page 05
Type 99 Long Rifle	Page 06
Type 99 Sniper Short Rifle.....	Page 07
Type 2 Paratrooper Rifle.....	Page 08
Hall-North Model 1843 Carbine.....	Page 09
Joslyn Model 1864 Carbine	Page 10
Winchester Model 1873 Rifle.....	Page 11
Springfield Model 1873 Trapdoor Rifle.....	Page 12
Krag-Jørgensen Model 1898 Rifle.....	Page 13
Colt Model 1895 Heavy Machinegun	Page 14
Springfield Model 1903 Rifle.....	Page 15
Thompson M1A1 Sub Machinegun	Page 16
United Defense M42 Sub Machinegun	Page 17
Browning Cal.30 M1917A1 Heavy Machinegun	Page 18
M14 Rifle mfd. by Winchester	Page 19
Armalite AR18 Assault Rifle	Page 20
Winchester Model 1901 Shotgun	Page 21
Mossberg Model 500A Shotgun	Page 22
Gew.88 Infantry Rifle	Page 23
Gew.98 Infantry Rifle	Page 24
Kar.98a Rifle w/ Early Production Stock	Page 25
Maxim MG08 Heavy Machinegun.....	Page 26
Kar.98k Rifle.....	Page 27
MP28II Sub Machinegun	Page 28
MG42 Machinegun.....	Page 29
4.5 cm PaK 184(r) Anti-tank Gun.....	Page 30
Walther MPL Sub Machinegun	Page 31
HK33 Assault Rifle w/ HK79A1	Page 32
Iron Barrel Percussion Blunderbuss.....	Page 33
Martini-Henry M1887 MKIV Rifle.....	Page 34
Magazine Lee-Enfield MKI* Infantry Rifle.....	Page 35
John Rigby Single Shot Side Lever Rook Rifle	Page 36
L2A1 Sniper Rifle.....	Page 37
Sterling MK5 (L34A1) Sub Machinegun	Page 38
Vetterli M1870/87 Infantry Rifle (Vetterli-Vitali)	Page 39
Carcano M1941 Infantry Rifle	Page 40
Springfield Model 1861 Percussion Musket mfd. by D. Pedersoli	Page 41
Henry Model 1860 Rifle mfd. by A. Uberti.....	Page 42
Perrin Mle 1865 Revolving Rifle	Page 43
Chassepot Mle 1866 Needle-Fire Infantry Rifle, 1st Model	Page 44
Wanzl M1854/67 Jäger Rifle	Page 45
Steyr Mannlicher M1888 Infantry Rifle	Page 46
Swiss Federal Model 1842 Sniper Shooter Rifle.....	Page 47
Milbank-Amster M1856/59/67 Sharpshooter Rifle.....	Page 48
Vetterli M1886 Sharpshooter Rifle	Page 49
Peabody M1867/77 Rifle mfd. by Providence Tool Company	Page 50
Schmidt-Rubin K11 Carbine	Page 51
Maxim MG11 Heavy Machinegun	Page 52
B&T APC9 Sub Machinegun	Page 53

SIG SG551-2 Assault Rifle.....	Page 54
FN P90 Personal Defense Weapon	Page 55
FN F2000 Tactical Bullpup Assault Rifle	Page 56
Swedish Remington Rolling Block M1867 Rifle.....	Page 57
Swedish Mauser M1896 Infantry Rifle.....	Page 58
Mosin Nagant M1944 Carbine	Page 59
DT Tank Machinegun.....	Page 60
AKS-74u Assault Carbine.....	Page 61
RP-46 Light Machinegun	Page 62
Saiga 20K Shotgun	Page 63
RPG-2 Anti-tank Grenade Launcher	Page 64
Vz.58p Assault Rifle	Page 65
Czech Mauser Vz.24 Short Rifle.....	Page 66
Polish PPS43 Sub Machinegun.....	Page 67
Wz.63 Sub Machinegun.....	Page 68
Zastava M21S Assault Rifle.....	Page 69
Zastava M72B1 Light Machinegun	Page 70
M56 Sub Machinegun	Page 71
MGV-176 Sub Machinegun.....	Page 72
Turkish T.C. Orman Berthier M1948 Short Rifle.....	Page 73
Turkish M1888/05/35 Infantry Rifle.....	Page 74
Micro Galil MAR Short Carbine (MODEL 699)	Page 75
Galil (Galatz) Sniper Rifle	Page 76
Micro Tavor Assault Rifle.....	Page 77
UZI Sub Machinegun, Sectionalized Model.....	Page 78
Argentine Mauser M1909 Infantry Rifle, 1st Model	Page 79
Argentine Mauser M1909 Carbine, 2nd Model.....	Page 80
Brazilian FN Mauser M1922 Carbine	Page 81
Brazilian Mauser M1935 Infantry Rifle.....	Page 82
Type 64 Sub Machinegun.....	Page 83
Type 63 Self-loading Rifle.....	Page 84
French Single Shot Percussion Pistol	Page 85
Starr Model 1863 Army Single Action Revolver	Page 86
Colt Model 1860 Army Revolver	Page 87
Colt Model 1855 Revolving Rifle, Early Production	Page 88
Barnside Model 1864 Carbine	Page 89
Spencer New Model Carbine	Page 90
Jezail Flintlock Musket.....	Page 91
Enfield Pattern 1853 Artillery Carbine, 2nd Model.....	Page 92
Westley Richards Breech-loading Carbine.....	Page 93
Wilson Capping Breech-loading 2 Band Rifle	Page 94
Japanese Gunport Matchlock Musket	Page 95
Japanese Large-caliber Matchlock Gun.....	Page 96
Japanese Matchlock Musket, HIZEN Style w/ Inlay.....	Page 97
Japanese Matchlock Musket w/ Rear Sight Hood	Page 98
A Brief History of Winchester Lever Action Rifles	Page 99-100
Japanese and Manchukuo Orders.....	Page 101
Gazette Bookmark	Page 102
シカゴ Q&A	Page 103-104
買取り / 下取りのご案内 - ご来店 / 通信販売をご利用のお客様へ-	Page 105-106
古式銃の買取り、下取りについての流れ	Page 107
無可動実銃 / 古式銃砲について.....	Page 108

Type 30 Infantry Rifle

Type 38 Infantry Rifle, Early Production



Type 30 Infantry Rifle
三十年式歩兵銃



全長 1,275mm
口径 6.5mm×50
装弾数 5発



Type 38 Infantry Rifle,
Early Production
三八式歩兵銃 初期型
(小石川製)



全長 1,276mm
口径 6.5mm×50
装弾数 5発



有坂成章大佐(当時)が開発し、1897年(明治30年)に日本陸軍制式となった歩兵銃で、約60万挺が生産されて日露戦争における主力小銃として使用されました。三十年式歩兵銃の登場以前に採用されていた二十三年式村田銃は、チューブ式弾倉により迅速な再装填が困難であった他、平頭弾を使用するため命中精度にも難がありました。三十年式歩兵銃はスウェーデン軍のM1894小銃を参考に、モーゼル・ライプの一体型ボルト使用するコックオン/クローゼンジャー方式を採用して設計が行われ、再装填もモーゼル式クリップを用いて迅速に行う事が可能となりました。また、銃本体と同時に内頭型弾頭を持つ口径6.5mmの三十年式実包が新たに開発されました。本銃のバックルの安全装置は切り替え位置が明確な為には誤操作を防ぐ事が出来た反面、フックが他の物に引っ掛かる恐れがあった他、防塵手袋を装着した状態での操作性に難がありました。



1905年(明治38年)に日本陸軍により制式制定された小銃です。三十年式歩兵銃を基に内部部品の簡略化や機関部への砂塵の侵入を防ぐ遊底覆の追加等の改良が加えられており、中国大陸等の過酷な環境下での信頼性を高めています。また、使用弾薬として新たに三十年式実包を尖頭弾化した三八式実包も採用されました。部隊配備は日露戦争後の1908年から始められ、第一次世界大戦で主力小銃として初めて大戦投入されて以降、九九式短小銃と共に第二次世界大戦の終戦まで使用されました。初期型は主に東京砲兵工廠(小石川)で生産されたが、軍用銃としては非常に丁寧に仕上げられており、照準に力が入らず、床尾板がプレート型となっているのが特徴です。東京砲兵工廠では1923年(大正12年)の関東大震災により甚大な被害を受けた為、一部機能を喪失生産機能が小倉工廠に移されました。尚、多くの初期型は教練用等として払い下げが行われました。



写真はすべて既刊雑誌掲載です。

Type 99 Short Rifle, Early Production

Type 99 Short Rifle,
Early Production
九九式短小銃 初期型
(小倉製)



全長 1,118mm
口径 7.7mm×58
装弾数 5発



Type 99 Long Rifle

Type 99 Long Rifle
九九式小銃 (名古屋製)



全長 1,258mm
口径 7.7mm×58
装弾数 5発



世界各国の主力小銃短縮化の流れに従い、九九式小銃（長小銃）よりも全長が約140mm短い歩兵銃と銃銃の中間サイズのモデルとして、昭和14年に九九式小銃と共に仮制式制定となった小銃です。その後、九九式小銃は生産が早期に終了しましたが、九九式短小銃は主力小銃として終戦時まで約250万挺が製造されました。九九式短小銃は、当時の日本の状況を反映するように時期によって細い部分の仕様が異なり、特に初期と末期のタイプでは品質や各部の仕様に顕著な違いが見られます。初期型は九九式小銃の特徴をそのまま残し、照尺に対空用の高射表尺が取り付けられている他、一脚も標準装備するなど手の込んだ作りになっています。また、銃床に水抜き穴（ドレイン・ホール）が設けられており、さく収止めにキャッチが付いているのも初期型の一般的な特徴です。小倉工廠は名古屋工廠に次いで九九式短小銃の生産数が多く、バリエーションにも富んでいます。



三八式歩兵銃の後継として、昭和14年（皇紀2599年）に仮制式制定となった日本陸軍の小銃です。最大の特徴は7.7mm口径への大口径化ですが、三八式歩兵銃では明物合わせや調整が必要だった部品の規格化も行われました。また、九二式重機関銃との弾薬の共通化も考慮されています。九九式小銃の全長は三八式歩兵銃とほぼ同じですが、対空表尺や折り畳み式の一體など新たな機能が追加されました。さらに、銃身内にはクローム・メッキが施されており、これは軍用小銃では世界初の試みと言われています。同時に仮制式となった短小銃モデルである九九式短小銃がその後主力小銃となった事もあり、九九式小銃（長小銃）の生産数は少数に留まり、特に戦後の現存数は極めて少ないものとなりました。九九式小銃の生産は名古屋工廠と東洋工業で行われましたが、その大半が東洋工業で生産され、名古屋工廠での生産は極少数に留まりました。



写真の銃はすべて現存銃です。

Type 99 Sniper Short Rifle

Type 99 Sniper
Short Rifle
九九式短狙撃銃
(名古屋製)



全長 1,118mm
口径 7.7mm×58
装弾数 5発



Type 2 Paratrooper Rifle

Type 2 Paratrooper Rifle
二式小銃



全長 1,118mm
口径 7.7mm×58
装弾数 5発



九九式短小銃を基に開発された狙撃銃です。従来の九九式狙撃銃は口径6.5mmの三八式歩兵銃をベースとしており、倍率2.5倍の九九式狙撃眼鏡が装備されていました。九九式狙撃銃では使用弾薬がより強力な7.7mm口径となっており、新たに倍率4倍の九九式狙撃眼鏡も開発されました。ベースとなった九九式短小銃との違いは、光学照準器及びそれを取り付ける為の台座の有無、ボルト・ハンドルが光学照準器に干渉するのを防ぐ為に長さが30mmほど延長されて下方に折り曲げられている点です。光学照準器の台座は2.5倍用と4倍用で形状が若干異なっており、生産時期によってこれらが混在して取り付けられています。光学照準器は銃の左側にオフセットされて取り付けられており、必要に応じて通常のアイアン・サイトでの照準も可能です。九九式狙撃銃には長小銃型と短小銃型の2種類が存在しますが、製造されたのは大半が短小銃型でした。



九九式短小銃を元に空挺部隊(挺身部隊、落下傘部隊)用に開発された特殊な小銃で、「テラ銃」(テ=挺身、ラ=落下傘の意味)とも呼ばれます。銃本体を二分割出来る空挺用小銃としては世界で唯一量産に成功しました。銃本体は一本のボルト状の塊により固定されており、横の面に設けられた半円形のリングを回転させて右方向に横を引き抜く事により銃本体を前後に分割可能です。高、横は前矢防止の為に完全には抜け落ちない構造となっています。九九式短小銃の初期型がベースとなっており、対象表尺は標準装備されていますが、一部は装備されていません。また、二式小銃として三十年式銃剣と互換性を保ったまま短縮した二式銃剣も製造されました。二式小銃は1942年から1944年の間に名古屋工廠で約19,000挺が製造されたに留まりました。元々特殊用途として作られた事もあり、1944年製の末期生産品でも他の兵器のような簡略化は行われませんでした。



写真の銃はすべて抜粋複製品です。

U.S. Hall-North Model 1843 Carbine

US Hall-North Model 1843
Carbine
ホール・ノース M1843
カービン



全長 1,015mm
口径 .52in.
装弾数 単発

U.S. Joslyn Model 1864 Carbine

US Joslyn Model 1864 Carbine
ジョスリン M1864 カービン



全長 985mm
口径 .54in.
装弾数 単発

本体右側面のレバーを操作してブリーチ・ブロックを持ち上げる事により、銃口からではなく銃室部前方から直接弾丸と発射薬を装填する特殊な後装式騎兵銃です。原型となったホールM1819小銃は、撃発機構がプリント・ロック(火打石式)でしたが、1833年にパーカッション・ロック(雷打式)に改良したモデルが登場し、合衆国陸軍が最初に採用した雷打式小銃となりました。1843年に登場した更なる改良モデルのM1843では、ブリーチレバーが本体右側面に移され、騎兵銃モデルが14,000挺生産されました。ホール銃はペリーの黒船来航時に徳川幕府へ献上された事で知られ、40挺のホール銃及び弾薬4,000発が4隻の黒船の1隻であるミシシッピ号に積み込まれていました。徳川幕府にはホール銃以外にもコルト製のパーカッション・リボルバー等が献上された記録が有る事から、献上されたホール銃も雷打式のホール・ノース M1843騎兵銃であった可能性が高いと考えられます。



レシーバーの上面には「U.S. SNORTH MIDDLETOWN 1843」のAddressと呼ばれる彫印がはっきりと入っています。

ベンジャミン・フランクリン・ジョスリンが開発した後装式単発騎兵銃です。ジョスリンが設計した一連の後装式小銃の内、M1861からM1865まではリム・ファイア方式の金属製薬室を使用し、右側面に指掛け用の突起が付いた特徴的なブリーチ・ブロックが左方向に回転して薬室が開く構造となっています。また、ハンマーはサイド・ロックではあるものの、ブリーチ・ブロック後部中央のファイアリング・ピンを叩く方式となっています。M1864はジョスリン・カービンの中でも南北戦争時に最も完成されていたモデルで、ブリーチ・ブロック右側面の突起がスプリング・テンションによるロック機能を備えた部品となった他、ファイアリング・ピンの周囲を囲む暴発防止筒(特)が取り付けられて安全性も向上しています。また、M1862ではバレル・バンド及びハット・プレートが真鍮製でしたが、M1864ではいずれも鉄製へと変更されました。

JOSLYN FIRE ARMS Co
STONINGTON CONN
1864

サイド・ロックには「JOSLYN FIRE ARMS Co / STONINGTON, CONN. 1864」の製造会社名と製造年が入っています。

写真の銃はすべて複製品です。

Winchester Model 1873 Rifle

Winchester Model 1873 Rifle
ウィンチェスター M1873 ライフル



全長 1,092mm
口径 .38 WCF
装弾数 13発



U.S. Springfield Model 1873 Trapdoor Rifle

US Springfield Model 1873
Trapdoor Rifle
スプリングフィールド M1873
トラップドア ライフル



全長 1,244mm
口径 .45-70
装弾数 単発



ウィンチェスター社で製造されたM1866(イエローボーイ)の改良型で、同社で最も成功したレバー・アクション・ライフルの一つです。44ヘンリー・リムファイア弾を使用するM1866では、フレームが銅と錫の合金である砲金により製作されていましたが、より強力なセンターファイア式の弾薬を使用するために不足していた事から、M1873では鉄製へと変更されました。他にも排弾孔へのダスト・カバーの追加や機関部サイド・プレート形状変更など若干の改良がなされています。

使用弾薬は当初.44-40 Winchester弾仕様のみでしたが、その後.38-40 Winchester弾及び.32-20 Winchester弾仕様のモデルが追加され、.44 WCF、.38 WCF、.32 WCFといった使用弾薬を示す刻印が打刻されるようになりました。尚、弾倉がチューブ式である為、後方の弾の弾頭が前方の弾の雷管部を刺突して暴発しないよう、弾頭の先端はフラットな形状となっています。また、弾薬の全長は1日付に関わらず1.592インチ(約40mm)と統一されていました。



アップバッキング上面には「MODEL 1873」のモデル名刻印が入っています。

米陸軍が1873年に制式採用した後装式単発ライフルで、ブリーチ・ブロックを手動で上方に跳ね上げて開き、弾薬の装填及び排莖を行う形態から「トラップドア」と呼ばれました。本銃は単発ではあったものの、その耐久性や.45-70弾の威力から軍用として高い評価を得ていました。.45-70弾は当初剛製の薬莖を使用していたが、発射時の膨張率が大きく薬室に張り付いて排莖が出来なくなる不具合が発生した為、その後薬室への張り付きが発生し難い真鍮製薬莖へと変更されました。M1873トラップドアは銃身長が560mmのカービン・モデルも製造され、19世紀末のインディアン戦争時には米国防兵隊によって使用されました。スプリングフィールドトラップドア小銃は、最終モデルであるM1888に至るまで生産期間によって改良が加えられており、M1884からは左のウィンチェスターがダイヤルで調整可能なBuffingtonリゾ・サイトが標準装備となりました。



サイド・ロックには真鍮製の「U.S. SPRINGFIELD」の刻印が入っています。

写真はすべて撮影者所有です。

U.S. Krag-Jørgensen Model 1898 Rifle

US Krag-Jørgensen
Model 1898 Rifle
クラグ・ヨルゲンセン
M1898 歩兵銃



全長 1,248mm
口径 30.40 Krag
装弾数 5発



米陸軍が単発式のスプリングフィールドトラップドア小銃の後継として制式採用した連発式のボルト・アクション・ライフルで、本体右側からクリップ等を使わずに装填する独特の弾倉を備えています。新型小銃採用に向けた米陸軍のトライアルは1892年に実施され、フルウェーのOle H. J. KragとErik Jørgensenが開発した小銃がM1892として採用されました。その4年後の1896年にも再度トライアルが実施され、M1892の改良モデルがM1896として採用されました。M1896ではクリッピング・ロッドを分割してストック内に収納する方式に変更された他、エキストラクターの突起がレシーバー・ブリッジ上のノッチに嵌り込む事により、ボルトが9度位置から容易に動かないように改良されました。更に1898年にはマガジン・カットオフの操作方向が変更されたM1898が採用されました。スプリングフィールド造兵廠では、M1903小銃が採用されるまでに約50万挺のクラグ・ヨルゲンセン小銃が製造されました。



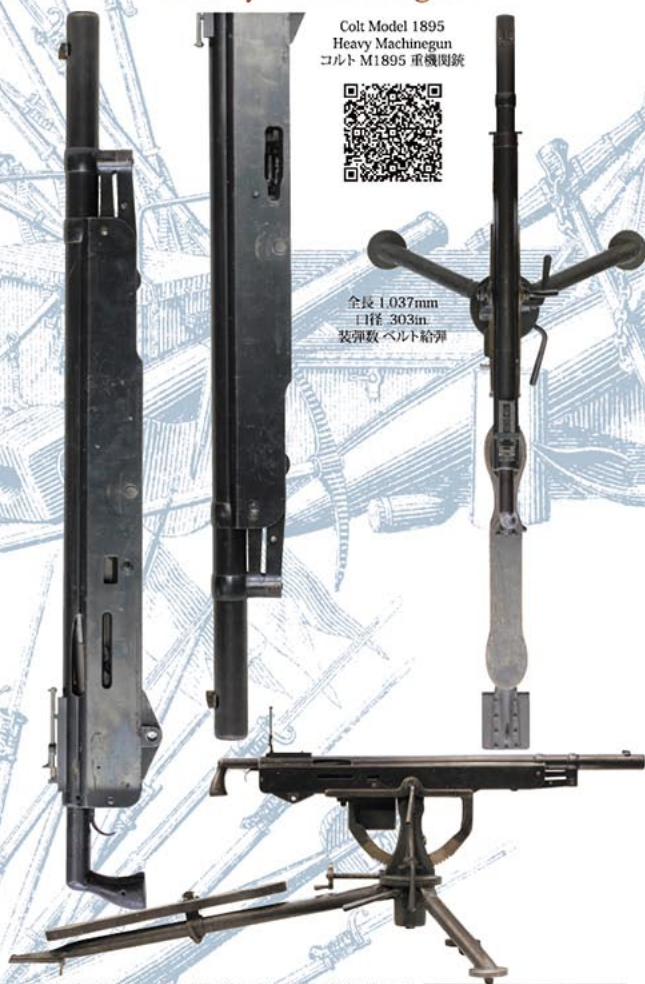
機関部左側面にはシリアルNo.の他、U.S. MODEL 1898. SPRINGFIELD ARMOYの烙印が入っています。

Colt Model 1895 Heavy Machinegun

Colt Model 1895
Heavy Machinegun
コルト M1895 重機関銃



全長 1,037mm
口径 30.3mm
装弾数 ベルト給弾



世界初の実用的なガス圧利用式機関銃で、肉厚の空冷式銃身を備えており、同時代の他の水冷式機関銃に比べて銃本体が小型軽量となっていました。本銃はジョン・M・ブローニングのバリエーションを元にコルト社で生産され、1895年に6mm Lee Navy弾仕様のモデルがM1895として米海軍に採用されました。本銃は1898年に起こった米西戦争で米海兵隊によって初めて大戦に投入されてその性能が認められ、ガトリング・ガンに代わる近代的な機関銃の元祖となりました。後に30-40 Kragや30-06 Springfield弾仕様の品も生産されましたが、米陸軍には制式採用されませんでした。本銃は米国以外にも様々な口径のモデルが各国に輸出され、日露戦争ではロシア軍が使用し、日本軍もロシア軍から鹵獲した品を準制式装備としました。多くのM1895は銃身に冷却フィンの追加されたM1895/14に改造された為、オリジナルの形態を保った個体は世界的に見ても現存数が極めて少なくなっています。



レシーバー後端からグリップに伸びる筒状の部分には、ハンマー・スプリングが収められています。

写真の銃はすべて無反動機銃です。

U.S. Springfield Model 1903 Rifle

US Springfield
Model 1903 Rifle
スプリングフィールド
M1903 小銃



全長 1,097mm
口径 30.06
装弾数 5発



1903年に米軍制式となったボルト・アクション・ライフルで、第一次世界大戦時の米軍主力小銃です。米軍が米西戦争の際に使用していたクラグ・ボルゲンセン小銃に対して、敵側のスベイン軍が使用したモーゼルM1893小銃の優秀性を痛感した事から、本銃もモーゼル系小銃を研究した結果を基に開発されたと言われています。しかしながら、M1903では撃針が2ピース構造となっている他、マガジン・カットオフを兼ねたボルト・リリースの構造等に独自の改良が見られます。スプリングフィールドM1903小銃の採用により、米軍はようやく世界水準に達したボルト・アクション・ライフルを手にする事になりました。尚、クラグ・ボルゲンセン小銃では歩兵銃と騎兵銃の二種類が存在しましたが、M1903小銃では銃身長24インチのモデルのみ製造されました。1903年にはM1903小銃と共に円頭弾の30.03弾が採用されましたが、その後1906年に使用弾薬が尖頭弾の30.06弾へと変更されました。



受取上部には「U.S. ROCK ISLAND ARSENAL MODEL 1903」
とシリアルNoが1列刻されています。

U.S. Thompson M1A1 Sub Machinegun

US Thompson M1A1
Sub Machinegun
トンプソン M1A1 短機関銃



全長 813mm
口径 45in.
装弾数 20/30発



米軍が1938年に制式採用したトンプソンM1928A1短機関銃は、軍用銃としては製造コストが高く、省力化のために各部の設計を見直したトンプソンM1短機関銃が開発されました。M1ではブリッシュ・ロック式の閉鎖機構に代わり、シンプルなブローバック方式へと変更された他、コッキング・ハンドルの位置も本体右側面へと移されるなど大規模な改良が加えられました。M1A1はM1をベースに撃針の固定化等の更なる改良を加えたモデルで、リア・サイトの変形を防止する為、三角形のサイト・ガードが標準装備されるようになりました。また、元々はM1として製造された物の中にも、後にM1A1に準じた改修を受けてA1刻印を追加された個体も存在します。しかしながら、トンプソン短機関銃はそもそも基本設計が量産向きとは言えず、更に始まっていた第二次世界大戦での大量の需要に応える事が出来なかった為、その後、より生産性の高いM3グリースガンにその座を明け渡す事になりました。



レシーバー右側面には「AUTO-ORDNANCE CORPORATION
BRIDGEPORT, CONNECTICUT, U.S.A.」の刻印が入っています。

写真の銃はすべて複製機です。

United Defense M42 Sub Machinegun

United Defense
M42 Sub Machinegun
UD M42 短機関銃



全長 823mm
口径 9mm×19
装弾数 25発

U.S. Browning Cal.30 M1917A1 Heavy Machinegun



U.S. Browning
Cal.30 M1917A1
Heavy Machinegun
ブローニング
30口径 M1917A1
水冷式重機関銃

全長 985mm
口径 30-06
装弾数 ベルト給弾

ハイスタンダード社で1940年代初頭に設計された短機関銃です。当時同社は英国向けの50口径機関銃の生産に注力していたが、その後の開発及び製造はユナイテッド・ディフェンス・サプライ社に移管されました。尚、ユナイテッド・ディフェンス社は銃器の製造設備を持たなかった為、実際の製造はマージン社を下請けとして行われました。本銃は元々トンプソンに代わる生産性の高い短機関銃として企画され、ストレート・ブローバックのシンプルな構造を持ち、セミ/フル・オートマチック射撃の切り替えも可能となっていました。しかしながら、本銃は主要部品が削り出しにより製作されており生産コストが高かった他、マガジンの強度不足や破損により作動不良が発生しやすいといった欠点がありました。米国防政府は最終的にUD M42を約15,000挺のみ購入し、CIAの前身である諜報機関OSSの作戦員が使用した他、彼らが支援する他国のレジスタンス等にも供給されました。



UNITED DEFENSE SUPPLY CORP.
NEW HAVEN, CONN.
UD M42 PAT. APPLIED FOR



第一次世界大戦時に米国が採用したM1917の改良型で、朝鮮戦争時まで活躍した水冷式の重機関銃です。M1917重機関銃は、ジョン・ブローニングが1901年に取得した反動利用方式の特許を基に設計され、当時各国が採用していたマキシム方式の機関銃より重量が軽減されていた他、高い信頼性を備えていました。発射方式はフル・オートマチック射撃のみで、クロススト・ボルト位置から射撃を行います。作動方式は反動利用のショート・リコイル式で、垂直にスライドするボルトにより閉鎖が行われます。発射後にボルトと銃身が同時に後退した後、ボルトが下降して閉鎖が解かれます。反動で後退した銃身がボルト・アクセラレーターと呼ばれる部品に衝突してボルトの後退運動を補助し、作動時の信頼性を高める構造となっていました。M1917の改良型として1936年に採用されたM1917A1重機関銃では、レシーバーのボルト・ムフレットの強化など各部に改良が見られます。



レシーバーやグリップ等のレイアウトには、空冷式のブローニングM1919A4重機関銃との共通点が見られます。

U.S. M14 Rifle mfd. by Winchester

US M14 Rifle
mfd. by Winchester
M14 ライフル
(Winchester製)



全長 1,125mm
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



M1ガーランドライフルの後継として開発された自動小銃です。M1ガーランドは1940年代で最も先進的な歩兵用ライフルの一つでしたが、時代はさらに進み、フル・オートマチック射撃が可能な自動小銃が求められるようになりました。これに伴い、着脱可能なボックス・マガジンやフル・オートマチック機構の追加の他、使用弾薬をM1ガーランドの 30-06 (7.62mm×63) に比べて案外短い7.62mm×51 NATO弾に変更したモデルが1957年にM14ライフルとして米軍に採用されました。M14はベトナム戦争初期における米軍の主力小銃でしたが、全長や重量がかさみ、連射時の反動も大きいため扱い難かった他、木製銃床がジャングルの湿気や赤外線、精度に悪影響を与えるといった欠点が指摘され、その後主力小銃の座をM16ライフルに譲る事となりました。しかしながら、M16に比べて射撃や精度に優れる事から、アフガニスタンやイラク戦にも投入されるなど、現在も使用が続けられています。



レシーバー後部上面にはシリアルNo.の他に、U.S. RIFLE 7.62MM M14. のモデル名や、WINCHESTER TRADE MARK. の明記が入っています。

Armalite AR18 Assault Rifle

Armalite AR18
Assault Rifle
アーマライト AR18
自動小銃

全長 940mm(736mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30/40発



1963年に米国のアーマライト社で開発された、5.56mm×45弾を使用する自動小銃です。同じアーマライト社で開発されたAR10やAR15自動小銃が可能な限り軽量の自動小銃にすることをコンセプトに設計されたのに対して、AR18は生産性の高い自動小銃を目指して設計が行われました。ハンマーやトリガーも含めプレス加工を多用しており、閉鎖機構はAR15系と同じローライディング・ボルト式ですが、作動方式はAR15のようなガス・インピンジメント・システムではなく、ショート・ストロークのガス・ピストン方式が採用されています。AR18及びそのコマーシャルモデルであるAR180自動小銃は、1969年から1972年にかけてアーマライト社で生産された他、1970年から74年にかけて日本の豊和工業でもAR180が生産されました。1979年からは英国のスターリング・アーマメント社でも製造が行われ、1985年まで製造が続けられました。



アッパー・レシーバーにはアーマライト社のロゴや「AR-18」のモデル名刻印、5.56mmの口径刻印が入っています。

写真の銃はすべて既刊掲載銃です。

Winchester Model 1901 Shotgun

Winchester Model 1901
Shotgun
ウィンチェスター M1901
ショットガン



全長 1,230mm
口径 10GA
装弾数 5発



Mossberg Model 500A Shotgun

Mossberg Model 500A Shotgun
モスバーグ M500A ショットガン



全長 1,025mm
口径 12GA
装弾数 5発



ジョン・M・ブローニングが設計し、ウィンチェスター社で製造されたローリング・ブロック式のレバー・アクション・ショットガンであるM1887の改良型です。M1887が登場した当時は黒色火薬を使用する弾薬が主流であったが、M1887も薬室等が黒色火薬向けに設計されていました。しかしながら、その後より高威力の無煙火薬を使用する弾薬が主流になり始めると、M1887では耐久性が不足している事が判明しました。その為、新たに各部の設計を強化したM1901が開発されました。M1887ではフィンガー・レバーとトリガー・ガードが一体構造でしたが、M1901では暴発防止のためフィンガー・レバーがトリガー・ブロックを内蔵した別部品となっているのが特徴です。また、M1887では12ゲージと10ゲージの2種類の口径が用意されていましたが、M1901ではウィンチェスター社が同社のM1897と競合する事を懸念して10ゲージのモデルのみ製造されました。M1901は1899年から1931年にかけて13,500挺が製造されました。

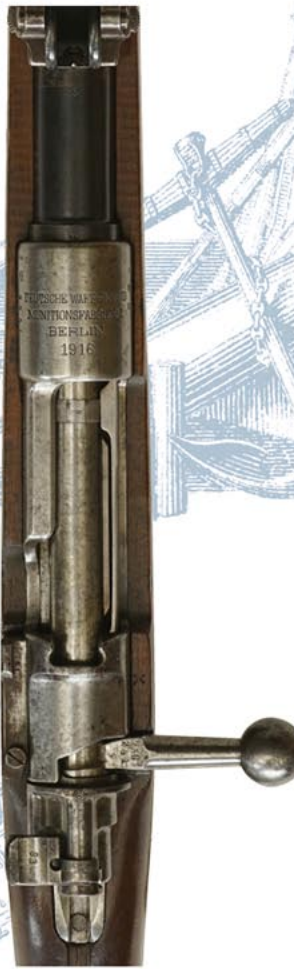


薬室部を側面にウィンチェスター社のロゴが入っている他、アッパー・クッキング上面にも同社の商標印刷が入っています。

米国のモスバーグ社が1960年代に開発したポンプ・アクション式ショットガンです。基本的な設計はチューブ・マガジンや内蔵型ハンマー等、先行するウィンチェスターやレミントン製の製品を踏襲していますが、レシーバー後部に大型で操作しやすいセーフティ・レバーを配置した他、内部には自動トリガー・ディスコネクターを備える等、高い安全性が確保されています。また、部品点数を絞った事により整備性を高めただけでなく、高い信頼性や堅牢性、低コスト化も実現しています。登場から半世紀近く経った現在でも、アクション・バーが片側から両側に増設された以外には基本設計は変わっておらず、その高い完成度が伺えます。当初は12ゲージの狩猟向けモデルのみでしたが、今日ではスポーツ射撃用や民間自衛用の他、法執行機関や軍用向けに数多くのモデル展開が行われており、ポンプ・アクション式ショットガンの代表的機種として全世界に普及しています。

銃身には「CHAMBERED FOR 2 3/4 AND 3 IN. SHELLS - 12 GA. - CYLINDER BORE - MADE IN U.S.A.」と刻印されています。

写真の銃はすべて既刊掲載です。

Gew.88
Infantry RifleGew.88
Infantry Rifle
Gew.88 歩兵銃全長 1,240mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発Gew.98
Infantry RifleGew.98
Infantry Rifle
Gew.98 歩兵銃全長 1,245mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発

1888年にドイツ軍で採用された、マンリッカー方式のクリップを使用する連発式ボルト・アクション・ライフルです。ドイツ帝国では1871年に単発式のモーゼルGew.71小銃を採用後、1884年にはGew.71をチューブ・マガジン式に改良したGew.71/84小銃を採用しました。しかしながら、その2年後の1886年にフランスが世界初の無煙火薬を用いた連発式小銃であるレベールM1886を採用した為、遅れを取ったドイツはGPK (ドイツ軍火器委員会) を組織し、その設計により無煙火薬とフランスの8mm×50レベール弾に倣った7.92mm×57弾を使用する本銃を開発し採用しました。このような経緯から本銃は委員会小銃 (Commission Rifle) とも呼ばれており、殆どがドイツ帝国近衛兵衛で製造されました。本銃の特徴でもある薄い鋼板製のバレル・ジャケットは、銃身が直接木部に接触するのを防いで命中精度を高める事を狙った物ですが、ジャケット内部に水が溜まりやすく、錆が発生する等トラブルの原因となりました。



本銃の薬室上面にはタンパ・レ造兵廠を示す印の他、製造年を示す「1890」の刻印が入っています。

Gew.88小銃の後継として1898年にドイツ帝国陸軍制式となったボルト・アクション・ライフルで、第一次世界大戦時のドイツ軍主力小銃です。Gew.98小銃はそれ以前のモーゼル式ボルト・アクション機構と異なり、メインのロッキング・ラグ2箇所に加えて、ボルト後部側面にそれが破損した際のバックアップとして機能するラグが1箇所追加されており、安全性が高められています。また、エキストラクターが弾倉内から出た直後の薬莖のリムと噛み合って薬室に装填後、排莖の直前まで保持し続けるコンロールド・フィードと呼ばれる方式で給弾が行われるのも特徴です。ボルト後端には3ポジションのセーフティ・キヤッチ・レバーが装備されており、コッキング状態でレバーを操作する事により、撃針及びボルトの固定/解除を切り替える事が可能です。本銃を以てモーゼル式のボルト・アクション機構が完成し、Kar.98k小銃等その後のドイツ軍用小銃の原型となりました。



薬室上面にはメーカー及び製造年を示す刻印が入っています。※上の写真の写真はすべて別個体です。

写真の銃はすべて既刊雑誌掲載です。

Kar.98a Rifle w/ Early Production Stock

Kar.98a Rifle
w/ Early Production
Stock
Kar.98a 小銃
(初期型)



全長 1,100mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発



Maxim MG08 Heavy Machinegun

Maxim MG08
Heavy Machinegun
マキシム MG08
重機関銃



全長 1,190mm
口径 7.92mm×57
装弾数 ベルト給弾



Gew.98歩兵銃の銃身長を約14cm短縮した騎兵銃で、1908年にドイツ軍が採用して騎馬兵科に支給した。第一次世界大戦では機動力を重視した突撃歩兵によって使用されました。スプリングの取り付け方法がバット・ストックを貫通する方式に変更された他、ハンドガードが薬室前方まで延長されました。また、銃床の短縮化に伴いウーニング・ロッドが省略された為、新たに叉銃用のフックが追加されました。さらにフロント・サイトにはガードが追加され、その前方にはマズル・カバー用の突起が設けられる等、各部に改良が見られます。第一次大戦後のヴァイマル共和政軍では、Gew.98歩兵銃及びGew.98のスプリング取り付け方法やリア・サイトに改良を加えたKar.98bが形式となりましたが、Kar.98aも一部で使用され、その際の年号が打刻された個体も見られます。初期型のKar.98aの銃床には、バット・ストックのボルト分解用ディスク及び銃床中央の指掛け溝が無いのが特徴です。



薬室上面にはメーカーと製造年を示す刻印に加えて、1920年に再調整が行われた事を示す「1920」の刻印も見られます。

1908年に採用されたドイツ軍初の制式機関銃で、マキシム機関銃のライセンス生産品です。基本構造はそのままに、使用弾薬をドイツ式7.92mm×57モーゼル弾としています。本銃はベルリンのシュパンタウ造兵廠でも製造が行われたため、シュパンタウ機関銃とも呼ばれました。連続射撃時の銃身過熱を抑える為、銃身の周囲に水冷ジャケットが装着されています。本銃には水冷ジャケットを爆弾の破片等から保護する為の円型プレートが銃口付近に装着されていたが、水冷ジャケット全体をカバーする装甲板や機関銃手保護用の大型シールドも装着可能でした。本銃には標準装備のワリ型銃床の他、対空銃床としても使用できる三脚も使用されました。また、直轄内蔵の同接射撃用照準器を用いる事により、遮蔽物の陰から射撃を行う事も可能でした。MG08は第一次大戦は勿論、ワイマル共和政そして第三帝国時代まで使用されました。

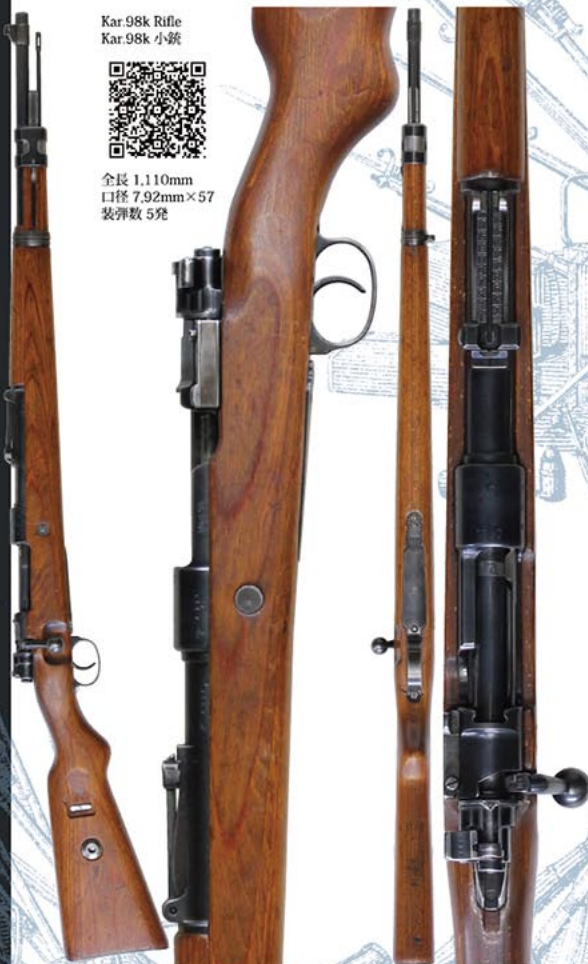


本体左側面のマウントにZF12照準器を装着する事が可能です。

写真はすべて既刊雑誌より。

Kar.98k
RifleKar.98k Rifle
Kar.98k 小銃

全長 1,110mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発

MP28II
Sub MachinegunMP28II
Sub Machinegun
MP28II 短機関銃

全長 812mm
口径 9mm×19
装弾数 20/32発



第二次世界大戦を通じてドイツ軍の主力小銃として使用されたボルツァクションライフルで、それ以前の歩兵銃に比べて短い全長や本体側面に沿わせて取り付けるスリングなど、騎兵銃的な特徴を持つモデルです。第一次世界大戦時の主力小銃であったGew.98歩兵銃から派生したモーゼル・スタンダードM1924短小銃やKar.98b小銃といったモデルを経て、1935年6月に制式となりました。Gew.98歩兵銃から受け継いだモーゼル方式のボルツァクション機構は、信頼性が高く堅牢で安全性も高かったため、最も完成されたシステムであるとも言われます。Kar.98k小銃は第二次世界大戦の終結までに非常に大量に生産されたため、数多くのバリエーションが存在しますが、ストックの材質（クルミの単材/合板）及びバットプレートの形状（フラット型/カッパ型）で大きく分類する事が可能です。また第二次大戦末期には、各部の仕様を簡略化したKriegsmodellと呼ばれる戦時省力型も生産されました。



写真上にはモーゼル社を示す142のコード及び製造年を示す1940の刻印が打刻されています。

第一次世界大戦中に塹壕戦で活躍したMP18短機関銃の発展型で、1920年代後半にヒュー・ゴッショマイザーが開発し、ハネル社で製造が行われました。MP18Iでは射撃機能がフル・オートマチック射撃のみでしたが、MP28IIではセミ・フル・オートマチック射撃の切り替えが可能となりました。この為、トリガーの上にプッシュ・ボタン式のセレクターが追加されているのが特徴です。また、MP18IではルガーP08と共用のスネール・マガジンを使用しましたが、MP28IIでは専用の箱型弾倉を使用します。リア・サイトについても、100mと200mの切り替え式であったMP18Iに対し、MP28IIでは100mから1,000mまで対応したタンジェント・サイトに変更されました。MP28II短機関銃は、第二次世界大戦前には主にドイツ警察で使用された他、大戦勃発後は武装親衛隊や治安維持部隊等でも使用されました。また、ドイツ国外のスイスやスペイン、ベルギーでもMP28のコピー品やライセンス品の製造が行われました。



本体上面には「MP28 II」のモデル名及びゴッショマイザーのモデル印が入っています。

写真はすべて既刊雑誌です。

MG42
MachinegunMG42
Machinegun
MG42
汎用機関銃全長 1,220mm
口径 7.92mm×57
装弾数 ベルト給弾4.5 cm PaK 184(r)
Anti-tank Gun4.5 cm PaK 184(r)
Anti-tank Gun
4.5 cm PaK 184(r)
対戦車砲全長 4,000mm
口径 45mm
装弾数 車発
対戦車砲

MG34の後継として第二次世界大戦中にドイツで開発された汎用機関銃で、MG34の生産性の低さを踏まえてプレス加工と溶接を多用しており、泥や埃にも強い設計となっています。MG42はリコイル・ブラスターにより発射速度が毎分約1,200発と非常に高速となっており、高い発射速度に伴う頻繁な銃身交換に対応するため、本体側面の銃身交換ラッチにより迅速な銃身交換が可能となっています。また、本銃用の三脚であるラフエッチ42は、ショック・アブソーバーと連動した可変射昇機構をMG34用のラフエッチ34から受け継いでおり、精密な射撃を可能としています。本銃はローラー・ロッキング式の閉鎖機構も含めて完成度が高く、戦後も再びドイツでは使用弾薬を7.62mm NATO弾に変更し、分離式アモ・ベルトを使用可能とする等の改良を加えたモデルがMG3として使用され続けました。また、ユーゴスラビアでは戦後前例としてドイツからMG42の製造設備を購入し、M53機関銃として国産化しました。



本体左側後面には「MG 42」のモデル名及びシリアルNo.に加えて、Mager社を示す「cra」のコードが刻印されています。

第二次世界大戦中にソ連軍から南獲したM1932 45mm対戦車砲「19-K」に対して、ドイツ軍がPaK 184(r)の南獲兵器名称を付けて使用した対戦車砲です。19-K対戦車砲は、モスクワの現コロリョフ市にあった第8大砲工場のV. M. Bering技師の主導により開発され、1932年に労働赤軍制式となりました。ベースとなったのはドイツ軍の3.7cm Pak36対戦車砲をソ連でコピーした口径37mmのM1930 (1-K) 対戦車砲で、19-K対戦車砲はその口径を45mmへと独自にスケールアップしたモデルです。19-K対戦車砲は、距離500mから43mmの装甲を貫徹可能とされていますが、大戦初期のドイツ軍主力戦車であるIII号戦車やIV号戦車の正面装甲には対抗できず、専ら軽戦車や装甲車等を目標としていました。本品はドイツ軍に南獲された後、19-K用よりも丈夫なドイツ軍用の車輪へと換装されたモデルです。45mm砲弾はドイツ軍用の物がそのまま使用出来たため砲弾の供給に問題はなく、補助兵器として軽装甲車両に対して戦果を上げました。

写真の銃はすべて既刊書籍蔵です。

Walther MPL Sub Machinegun



Walther
MPL Sub Machinegun
ワルサー
MPL 短機関銃



全長 737mm(455mm)
口径 9mm×19
装弾数 32発

ドイツのワルサー社が1950年代末に開発した短機関銃で、イタリアのルイギ・フランキ社が開発したLF57等と同様のプレス製レシーバー及びL字型ボルトを備えています。コッキング・ハンドルはボルトと独立しており、射撃中に前後しない構造となっている他、セーフティを兼ねたセレクター・レバーは左右どちらからでも操作可能なアンビタイプです。ワルサーMPシリーズは銃身長長の異なる二つのモデルが生産され、銃身長の長いモデルがMPL、ショート・モデルがMPKと呼ばれます。本銃は戦後のオープン・ボルト式短機関銃としては後発で比較的高コストだった事もあり、競合するHK社製のMP5等にシェアを奪われ、大規模な採用はありませんでした。しかしながら一部ではその高性能が評価され、限定数が西ドイツ警察やメキシコ海軍を始めとする諸外国で採用されました。また、ワルサー社と提携関係があったフランスのManurhin社でもライセンス生産が行われました。



本品はManurhin社でライセンス生産された品で、マガジン・ハウジング左側面には同社のロゴが入っています。

HK33 Assault Rifle w/ HK79A1

HK33 Assault Rifle
w/ HK79A1
HK33 自動小銃
(HK79A1付)



全長 918mm
口径 5.56mm×45
装弾数 25/30/40発



ドイツのHeckler & Koch (HK) 社がGew.3自動小銃を再設計してスケール・ダウンし、5.56mm×45 (223 レミントン) 弾を使用できるようにした自動小銃です。作動方式についてもGew.3自動小銃と同様のローラー遅延ブローバック方式となっています。HK33自動小銃の開発は1960年代半ばから後半頃に始まり、1968年に生産が開始されました。HK33自動小銃は、NATO加盟国が5.56mm弾を使用する新型小銃への切り替えを行っていた中、ドイツ連邦軍の次期制式小銃として候補に上げられながらも廃案となり、西ドイツでは警察や特殊部隊など限定的な配備に終わりました。しかしながら、小口径による取り回しの良さに加え、高い精度と信頼性、堅牢な作り等が評価されて、各国の特殊部隊や警察の一部などで採用され、トルコ、ミャンマー等ではライセンス生産も行われました。NATO制式弾薬であるSS109に対応したHK33Eの他、HK社製の自動小銃らしく短縮型のHK53やHK23機関銃等の各種派生型も製造されました。



HK79A1の左側面にはモデル名及び「40mmx46」の口径表示刻印が入っています。

写真の銃はすべて写真撮影機です。

Iron Barrel Percussion Blunderbuss

Iron Barrel
Percussion Blunderbuss
ブランダバス
前装式打撃銃



全長 750mm
口径 39mm
装弾数 単発

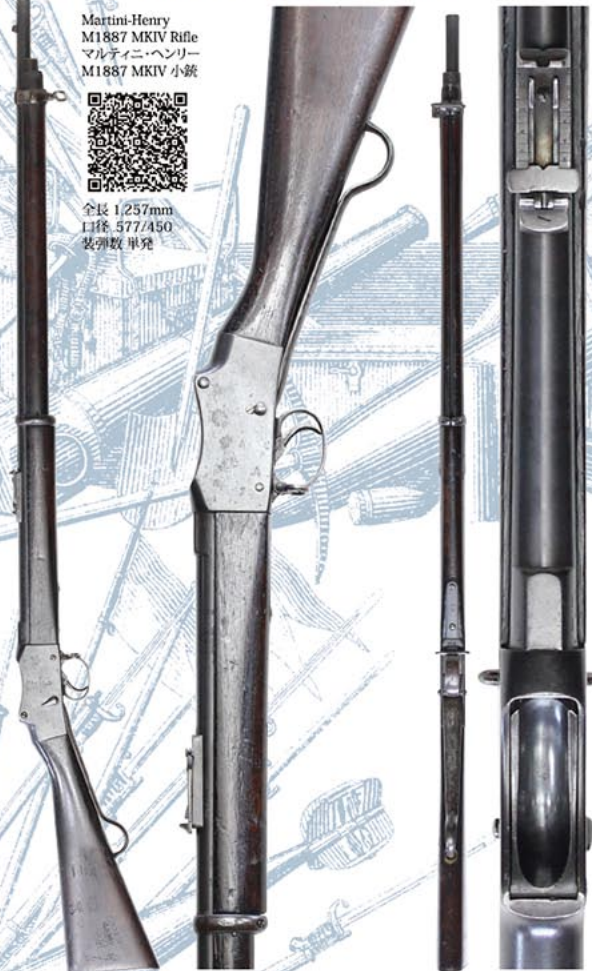


Martini-Henry M1887 MKIV Rifle

Martini-Henry
M1887 MKIV Rifle
マルティニ・ヘンリー
M1887 MKIV 小銃



全長 1,257mm
口径 577/450
装弾数 単発



「ラッパ銃」とも呼ばれる、大口徑短銃身の軽量で扱いやすい前装式小銃で、銃口がラッパのように広がった形状をしているのが特徴です。このラッパ型の銃口は、移動中や馬主でも火薬や弾丸を容易に装填可能であった他、当初は弾丸を拡散させて近距離での制圧に有利であると考えられていた事から、主に騎兵隊や海軍の近接戦闘用に支給されました。同、海軍モデルのブランダバスは通常良鍍製の銃身を使用しました。その後、ラッパ型銃口には当初想定されていた程の弾丸拡散効果が無い事が判明した為、ブランダバスは19世紀中頃に人々と完全に時代遅れとなり、前時代の騎兵銃の代名詞として扱われるようになりました。本品は1860年代に英国で製造された前装式のブランダバスで、銃身はブラム・ブラウンのダマスカス・バレルになっています。主要な金具は全体に鍍金が施されており、軍用（官給品）のブランダバスに典型的なデザインとなっています。



銃口はラッパ状に広がっています。

主に19世紀後半に英国とその植民地で使用された、単発式のレバー・アクション・ライフルです。金属製薬莖の突包を用いる後装式として当初から設計された英軍初の小銃で、本体下部のレバーを押下げるとプリ・チ・ブロックが下降し装填・排莖が行われます。マルティニ・アクションは、1860年代初頭に米国で考案されたピーボディ・アクションを基に、スイス人のフレデリック・フォン・マルティニが撃発機構をストライカー方式に改めるなどして考案されました。一方、英国のアレクサンダー・ヘンリーによりヘンリー・ライフルが考案されると、これらを組み合わせて1870年代にマルティニ・ヘンリー銃が設計されました。翌1871年より最初のモデルであるMKIの生産が開始され、その後数度にわたる小改良を経て1886年から生産されたのがMKIVです。MKIVはセーフティの大型化やレバーの延長、機関部の強化等が行われたマルティニ・ヘンリー銃の完成形です。



機関部には製造年の他、王立造兵廠を示す「ENFIELD」の刻印や王冠とRの文字を組み合わせた刻印が入っています。

Magazine Lee-Enfield MKI* Infantry Rifle



Magazine Lee-Enfield MKI*
Infantry Rifle
マガジン・リー・エンフィールド
MKI* 歩兵銃



全長 1,266mm
口径 30.3in
装弾数 8発

1896年にイギリス軍制式となったボルト・アクション・ライフルで、MLM(マガジン・リー・メトフォード)MKII小銃の改良型です。MLM小銃からの改良点はライフルの形状で、7条のメトフォード型ライフルから5条のエンフィールド型ライフルとなりました。断面がなだらかな山と谷を深くメトフォード型ライフルに対し、エンフィールド型ライフルでは角張った山と谷を描いた形状となっています。外見上はMLM MKII小銃から変化がなかったため、エンフィールド型ライフルを示す「E」の刻印が銃身に打刻されているのが特徴です。ライフルを改良するに従来の黒色火薬を用いた弾薬から、無煙火薬の弾薬に対応するためのものですが、銃身の寿命がより長くなり、射撃精度も僅かながら向上しました。本銃は後のSMLE(ショート・マガジン・リー・エンフィールド)小銃の基礎となりました。



本体左側面には長距離での追従射撃時に使用するバレー・サイトが装備されています。

John Rigby Single Shot Side Lever Rook Rifle



John Rigby
Single Shot Side Lever
Rook Rifle
リグビー・サイド・レバー
ルック・ライフル



全長 1,055mm
口径 9mm (360 No 5 Rook)
装弾数 単発

レシーバーの右側面に銃身をブレイク・オープンする為のレバーが付いた、狩猟用の小口径単発ライフルで、英国ではRook and Rabbit RifleもしくはRook Rifleと呼ばれています。その名の通り、狩猟を主目的としないうにカントリー・ウォーキング時に偶然見つけたRook(カラス)やRabbit(ウサギ)等の小動物を狩るのに適度な威力のライフルで、携行時にも負担にならない軽量化となっています。元々は1883年に英国王室御用達のHolland & Holland社によって開発されました。当時はこのような趣味は特権階級のみならず、銃の作りも非常に凝ったエレガントで質の高い品になっています。Rook RifleはHolland & Holland社以外にもWestley Richards社やW.W. Greener社、John Rigby社など英国の他の有名銃器メーカーでも19世紀末に生産され、英国国内だけではなく大英帝国全体の特権階級の間で流行しました。Rook Rifleのアクションはブレイク・アクションが主流でしたが、マルチ・ニ・アクションを小型化したタイプも製造されました。



本体右側面のレバーを操作する事により、銃身がブレイク・オープンします。写真は銃はすべて既取組銃です。

L42A1 Sniper Rifle

L42A1 Sniper Rifle
L42A1 狙撃銃



全長 1.181mm
口径 7.62mm×51
装弾数 10発



1970年に英軍制式となったボルト・アクション式の狙撃銃です。1957年にNATO標準弾薬の7.62mm×51弾を使用するL1A1が英軍主力小銃として採用されると、ロイヤル・スモール・アームズ・ファクトリー・エンフィールドでは既存のNo.4 Mk1(T)及びNo.4 Mk1*(T)狙撃銃の使用弾薬を.303ブリティッシュ弾から7.62mm×51 NATO弾に変更する改修が行われました。この改修には7.62mm NATO弾に対応した鍛造製ヘビー・バレルへの変更、フォア・エンド及びハンドガードの短縮が含まれており、1970年から71年にかけて約1,080挺が改修されました。銃身とフォア・エンドの接合による射撃精度への影響を抑える為、L42A1の銃身はフリー・フローティング方式となっています。マガジンについても、マガジン・リップの突起がエッジクォーターとして機能する7.62mm NATO弾に対応したタイプへと変更されました。3.5倍のNo.32スコープも使用弾薬の変更に伴う弾道の変化に対応する為に改修され、エレベーション・ドラムが変更されています。



機頭部左側面には「L42A1 D71」の刻印が入っており、本品が1971年にエンフィールド造兵廠で製造された事が判ります。

Sterling MK5 (L34A1) Sub Machinegun

Sterling MK5 (L34A1) Sub Machinegun
スターリング MK5 (L34A1) 短機関銃



全長 860mm(655mm)
口径 9mm×19
装弾数 34発



スターリング短機関銃は、大戦末期に試作品が完成したバチェット短機関銃の発展型で、1953年にバチェットMK2 (L2A1) として採用された後、スターリングの名称で呼ばれ始めた改良型のスターリングMK3 (L2A2) を経て、1956年に最も生産されたスターリングMK4 (L2A3) が採用されました。高い信頼性とオープン・ボルト方式の短機関銃としては良好な命中精度を備える他、ステン短機関銃用の生産設備や工具類を流用できるような設計されているなど、コスト削減にも配慮されていました。英陸軍では制式小銃のL1A1がセミ・オートマチック射撃のみであった事もあり、スターリング短機関銃は近接戦闘用に大量配備され、40万挺以上が生産されました。スターリングMK5 (L34A1) は、スターリングMK4 (L2A3) を基に特殊部隊向けに開発された消音短機関銃で、1967年にイギリス軍制式となりました。特徴的な大型サイレンサーの下部には、銃の保持や断熱効果を狙った木製のハンドガードが取り付けられています。



マガジン・ハウジング上面にはシリアルNo.の他、「STERLING SMG 9MM MK5 (L34A1)」のモデル名刻印が入っています。

写真はすべて撮影機材です。

Vetterli M1870/87 Infantry Rifle (Vetterli-Vitali)

Vetterli M1870/87
Infantry Rifle (Vetterli-Vitali)
ベテューリ M1870/87 歩兵銃



全長 1,346mm
口径 10.4mm×47R
装弾数 4発



ベテューリM1870小銃は、カルカノM1891小銃が採用される以前のイタリア軍の主力小銃です。基本構造はスイスで開発されたベテューリ式のボルト・アクション機構に改良を加えたもので、カルカノM1867小銃の後継として1870年に単発式のベテューリM1870小銃が開発されました。M1870はイタリア軍初の金属薬莖を使用する主力小銃で、Brescia, Terni, Torino, Torre Annunziataの各造兵廠で生産が行われました。その後、列強の主力小銃の連発化に伴い、1887年にはM1870をベースにピタリ式の弾倉を追加して連発式としたM1870/87小銃が開発されました。M1870/87小銃は、スイスのベテューリ小銃と混同しないように、欧米ではベテューリ・ピタリと呼ばれています。更に第一次世界大戦中の1915年には、口径をカルカノM1891小銃と同じ6.5mmへと変更したM1870/87/15と呼ばれるモデルも開発され、主に砲兵や輜重兵等の小銃を主武装としない部隊の防衛用に使用されました。



オクタゴンの薬室側面にブレシア(Brescia)造兵廠の刻印が入っています。

Carcano M1941 Infantry Rifle

Carcano M1941
Infantry Rifle
カルカノ M1941 歩兵銃



全長 1,175mm
口径 6.5mm×52
装弾数 6発



イタリア軍が採用したカルカノM1891小銃の発展型です。イタリアでは1938年にM1891小銃の後継として、使用弾薬をより強力な7.35mm×51弾に変更し、全長を短縮して携行しやすく改良したM1938短小銃が開発されました。M1938短小銃は大口径化および全長の短縮の他に、照尺を300mの固定式に変更することにより、生産の簡略化も図られていました。また、M1891の騎兵銃モデルについても同様に、口径を7.35mmとし、リア・サイトを固定式に変更する等の改良を行ったM1891/38騎兵銃と呼ばれるモデルが製造されました。その後第二次世界大戦が勃発すると、イタリア軍では新型の7.35mm弾の供給が不足した為、主力小銃の口径を再び6.5mmに統一する事となり、6.5mm口径仕様様のM1938短小銃やM1891/38騎兵銃が製造されました。また、その際に長銃身型として、M1941歩兵銃も生産されました。M1941のリア・サイトは300mから1,000mまで100mずつ調整可能となっており、スライダーを銃口側に倒すと200m用のサイトが使用可能となっていました。



薬室上面にはサヴォイア王家を示す王冠の刻印が入っています。

写真の銃はすべて無実弾銃です。

Springfield Model 1861 Percussion Musket, Davide Pedersoli Reproduction

Springfield Model 1861
Percussion Musket,
Davide Pedersoli
Reproduction
スプリングフィールド
M1861 マスケット
(デビッド・ペデルゾリ社複製品)



全長 1,410mm
口径 .58in
装弾数 単発



スプリングフィールドM1861マスケットは、南北戦争中に合衆国陸軍(北軍)及び海兵隊が主力小銃として使用したミニエー式のライフルド・マスケットで、同時代の小銃の中でも特に堅牢さとコストパフォーマンスに優れていました。一方、南軍の制式小銃で、同じくミニエー式のエンフィールド小銃は、より命中精度と射程に特化していたと言われていました。スプリングフィールドM1861マスケットは、低コストであったにも関わらず生産が需要に追いつかなかったため、スプリングフィールド造兵廠以外の民間業者でも製造が行われました。中でもコルト社で製造されたM1861マスケットは特に高品質で、更に独自の小改良が加えられていたため、M1861コルト・スペシャル・マスケットとも呼ばれました。尚、このコルト社が行った小改良は、スプリングフィールドでも行われるようになりました。本品はイタリアのデビッド・ペデルゾリ社で製造された前装式射撃用の複製品です。



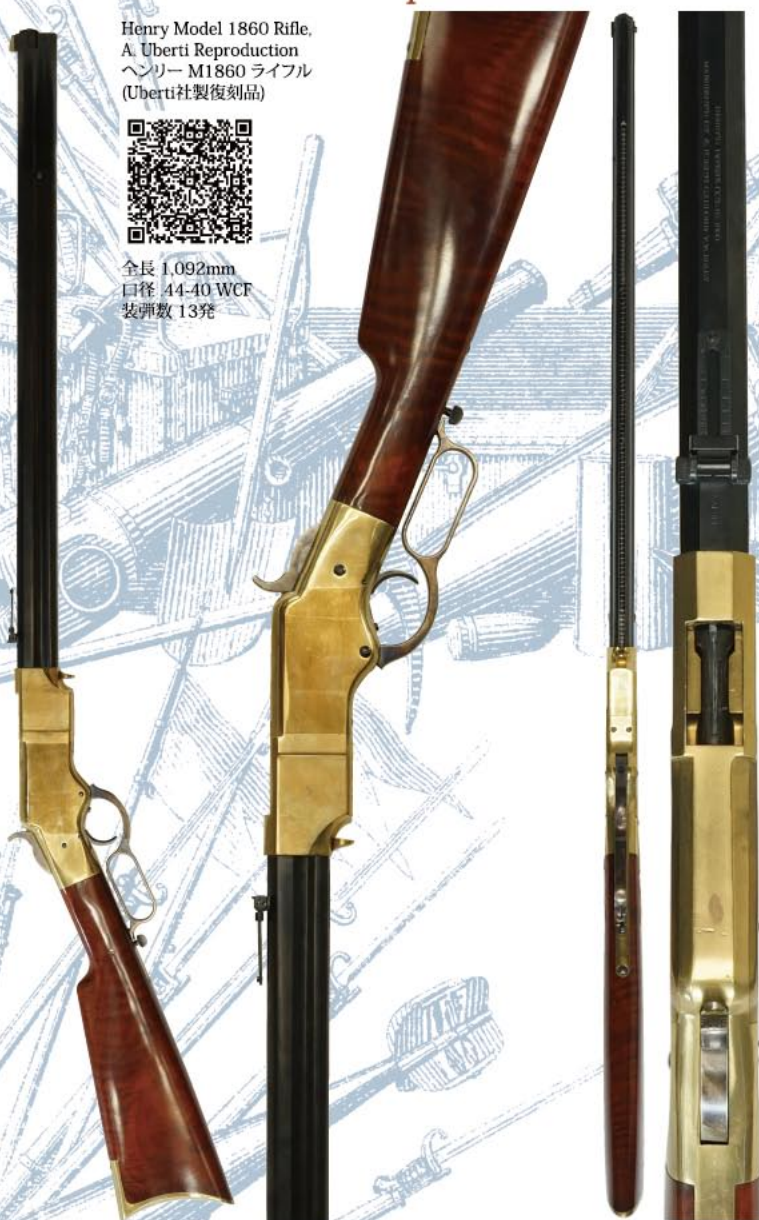
銃身基部左側面にイタリアのデビッド・ペデルゾリ社製の複製品であることを示す「dp」のマークと「PEDERSOLI」の刻印などが入っています。また「ITALY」と口径表示の「CAL.58」に加えて、「BLACK POWDER ONLY」というオリジナルには無い刻印が入っています。(口径15mmのブラックパウダー仕様の意味)

Henry Model 1860 Rifle, A. Uberti Reproduction

Henry Model 1860 Rifle,
A. Uberti Reproduction
ヘンリー M1860 ライフル
(Uberti社製複製品)



全長 1,092mm
口径 44-40 WCF
装弾数 13発



ホーレス・スミスとダニエル・ウェッソン(後にスミス&ウェッソンを設立)が開発したボルカニック拳銃の基本設計を拡大してライフルとしたもので、1860年にニューヘイヴン・アームズ社初のレバー・アクションライフルとして発売されました。南北戦争中は軍の制式装備とはなりませんでした。自費購入した北軍兵士によって多数が使用され、1866年の生産終了までに約14,000挺が製造されました。その後登場した改良型であるウィンチェスター・ライフルとは装弾方法が大きく異なり、マガジン・フォロワーを前方までスライドさせた後、チューブ式弾倉前部を回転させて開き、前方から装弾を行う構造となっています。尚、銃身下部にハンドガードが装備されていないため、連射射撃後に銃身が過熱すると銃の保持が困難になりました。イタリアのUberti社では、現在も実用に使用弾薬をセンター・ファイアの.44-40弾としたヘンリー・ライフルの複製品を製造しています。



マガジン・フォロワーを前方にスライドした状態で弾倉前部を回転させて開き、装弾を行います。

写真の銃はすべて無装弾状態です。

Perrin Mle 1865 Revolving Rifle

Perrin Mle 1865
Revolving Rifle
ペラン Mle 1865
リボルビング・ライフル



全長 1,110mm
口径 12mm
装弾数 6発



ペランMle1865リボルビング・ライフルは、パリにあったPERRIN & CIE. BTE. Paris社の創設者ルイ・ペラン (Louis Perrin) が設計し、1873年から1880年代に生産されたMle1865リボルバーを拡大してライフルにしたモデルです。ペラン社の製品は、現存数が少ないため知名度は低いものの、1851年のロンドン万博及び1855年のパリ万博での受賞実績があります。本銃は当時としては画期的な6連発ダブル・アクションのセンター・ファイア式で、試作品がMle1865リボルバーとセットでフランス陸軍のトライアルに提出され、シャスボー・ライフルとルフォッシュ・ピストルの組み合わせへの対抗馬となりましたが、リボルバーとライフルのいずれも採用される事はありませんでした。ライフル・モデルが6連発のセンター・ファイア式であったにも拘らずトライアルでシャスボー・ライフルに敗北したのは、拳銃弾と殆ど変わらない威力の弾薬が軍用小銃に適していないと軍部に判断された為と考えられています。



大きな山型の板バネを使用したローディング・ゲートは、センター・ファイア弾を装填するのに相応しい頑丈な造りになっています。

Chassepot Mle 1866 Needle-Fire Infantry Rifle, 1st Model

Chassepot Mle 1866
Needle-Fire Infantry Rifle,
1st Model
シャスボー
Mle 1866 歩兵銃 (1型)



全長 1,310mm
口径 13mm
装弾数 単発



1866年にフランス軍制式となったニードル・ファイア式のボルト・アクション・ライフルで、プロイセンのドライゼ小銃の機構を参考に、アントワヌ・アルフォンズ・シャスボーが発明したガス漏れ防止用機構が取り入れられています。ドライゼ小銃は発射時の薬室からのガス漏れを抑える為に鋼製の弾薬を使用し、射程距離が短い欠点がありましたが、シャスボー小銃はボルト・ヘッドにゴム製のリング (塞環) が追加されており、発射時の圧力によって塞環が押し潰されて薬室内壁に密着し、薬室からのガス漏れを防ぎました。シャスボー小銃は、サン・ディエヌ造兵廠などフランス国内で100万挺以上が製造された他、各国でライセンス生産も行われました。1868年までに製造されたシャスボー小銃の極初期型 (1型) ではボルト・ハンドルの後部にチェックリングが入っていた他、1869年まではコッキング・ピース後部に大きな切れ込みが入っていました。



薬室前方の銃身右側には「S. 1867」の刻印が入っており、St. Etienne造兵廠で1867年に製造された事が判ります。また、フランス第二帝政時代の1870年以前に生産された品に見られる「MI」の刻印が入っています。これは「Manufacture Impériale (王立造兵廠製)」を意味しています。

写真の銃はすべて兵隊数蔵です。

Wänzl M1854/67 Jäger Rifle

Wänzl M1854/67
Jäger Rifle
ウェンツェル
M1854/67 猟兵銃



全長 1,100mm
口径 14mm×33R Wänzl
装弾数 単発



オーストリア軍は、1866年に勃発した普墺戦争でドライゼ小銃を使用したプロイセン王国軍に惨敗し、後装式小銃の開発が急務となりました。ウィーンのガンスミスであったウェンツェルは、当時の制式小銃であった前装式のローレンツ小銃を後装式に改造するシステムを考案し、1867年にオーストリア軍に制式採用されました。このウェンツェル・コンバージョン・システムを用いて、オーストリア軍の保有していた約7万挺のローレンツ小銃が後装式に改造され、同時に登場したヴェルンドルM1867小銃が全軍に行き渡るまで使用されました。ウェンツェルM1854/67小銃は、ローレンツM1854小銃をベースに後装式に改造したモデルです。ウェンツェルM1854/67の猟兵銃モデルは、歩兵銃に比べて短い銃身を備えており、トリガー・ガード後方に指掛けが設けられているのが特徴です。また、リア・サイトは新たに制式となった14mm×33Rウェンツェル弾に対応したタイプへと換装されています。



トラップ・ドア型の後装式で、ハンマーと連動したゼンガハマーをリリースした際に前進し、ブリーチ・ブロック後部をロックします。

Steyr Mannlicher M1888 Infantry Rifle

Steyr Mannlicher
M1888 Infantry Rifle
ステアー・マンリッカー
M1888歩兵銃



全長 1,280mm
口径 8mm×52R
装弾数 5発



軍用銃としては世界初のストレート・ブルのボルト・アクション ライフルであったマンリッカーM1886歩兵銃の改良型です。フェルディナント・マンリッヒャー（マンリッカー）は、1884年にストレート・ブル機構を開発した後、翌1885年には5発装填されたエンブロッカー・クリップごと機関部上部から固定式弾倉に挿入し、最終弾が薬室に送り込まれると同時に空になったクリップが弾倉底部から自動的に排出されるシステムを開発しました。これら二つの新機構を備えたM1886歩兵銃は、量産が始まってすぐに使用する11mm×58R弾の旧式化問題に直面したことから、1888年には8mm×52R マンリッカー弾を使用するマンリッカーM1888歩兵銃が制式となり、1890年までの間に約110万挺が生産されました。M1888歩兵銃では口径変更に加え、新型弾薬に対応した1,800-2,500mの射程を持つロング・レンジ・サイトがリア・サイト右側面に追加された他、センター・バンド右側面にも長距離用のフロント・サイトが追加されました。



薬室上面には「Österreichischen Waffenfabriks Gesellschaft（オーストリア武器製造会社）」を略した「GWG」の刻印が入っています。

写真はすべて作者撮影です。

Swiss Federal Model 1842 Sniper Shooter Rifle

Swiss Federal Model 1842
Sniper Shooter Rifle
スイス連邦 M1842
狙撃射手銃



全長 1,220mm
口径 18mm
装弾数 単発



Milbank-Amsler M1856/59/67 Sharpshooter Rifle

Milbank-Amsler
M1856/59/67
Sharpshooter Rifle
M1856/59/67
武装警察 猟兵熟練射手銃



全長 1,132mm
口径 10.5mm
装弾数 単発



1817年になってスイス連邦軍では制式小銃の全軍統一が初めて行われました。それまでのスイス軍では、独立性的な連邦制の下で各州が独自に小火器を調達していました。1842年には光学測距装置を備えない狙撃銃 Schafschützenstutzen fädgenössisches Modell 1842, Empfehlung (狙撃射手銃 スイス連邦モデル 1842) が連邦軍用として制式化されましたが、名称の後に Empfehlung (推奨) とあるように、あくまで基準を定めただけで実際には各州で調達する際の目安に過ぎませんでした。口径は 15mm から 16.5mm と定められていましたが、本品のように口径 18mm の銃も確認されています。各州で民間銃工に製作させた為、バリエーションが多数存在します。Tyrolean buttstock と呼ばれる伝統的な狩猟用のカーブが深いリット・プレートが付いた大きなバット・ストック、前方のトリガーが針状になっているセット・トリガー、オクタゴン・ヘビー・バレル、着弾装置が標準装備となっている他は個体差がかなり見られました。



後方のトリガーでセットを行い、前方の鋭敏な針状トリガーで発射を行うダブル・セット・トリガーを備えています。

ドイツ語で Jägergewehr Modell 1856/59/67 と呼ばれる、スイス武装警察が使用した軍用銃です。Jäger は元猟師など大隊前から銃の取り扱いに慣れた猟兵と呼ばれる兵士で構成された小人数編成の部隊を示します。セット・トリガーが付いた猟兵銃は、(簡易) 狙撃銃もしくは熟練射手銃とも訳されます。当時光学照準器 (スコープ) は装備されておらず、セット・トリガーにより命中精度を高めていました。全長は通常の歩兵銃よりも短く、当時騎馬を本分としていた武装警察官に支給されました。スイスの軍用銃としては珍しく、さくぐが当初から付かないモデルです。銃身右側面には銃剣を差し込むバヨネット・レール (着剣装置) が付いています。前装弾式であった M1856 猟兵銃は、1859 年に小改良が加えられ M1856/50 となりましたが、その後 1860 年代の列強における主力小銃後装化の流れに合わせて、1867 年にミルバンク・アムスラー・コンバージョン・システムを用いて後装弾式に改良され M1856/59/67 となりました。



Milbank-Amsler Conversion とは、アメリカ人の Isaac Milbank が発明したシステムをスイス人の Rudolf Amsler が完成させたスイス軍独自の後装式システムです。

写真の撮影すべては数研模型です。

Vetterli M1886 Sharpshooter Rifle

Vetterli M1886
Sharpshooter Rifle
ベテューリ M1886
単発精密射撃小銃



全長 1,280mm
口径 10.4mmCF
装弾数 単発



Peabody M1867/77 Rifle mfd. by Providence Tool Company

Peabody M1867/77 Rifle
mfd. by Providence Tool Company
ピーボデー M1867/77
工兵銃



全長 1,316mm
口径 10.4mm×38R
装弾数 単発

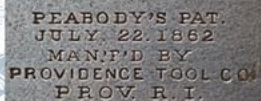


ベテューリ小銃はWinchester社製のM1866イエローボーイのマガジン・チューブとエレベーター給弾機能を参考にした、スイス軍初の連発式小銃として有名ですが、連発銃の開発と同時にセット・トリガーを備えた標的射撃用の単発精密射撃小銃も作られました。M1869から最終モデルのM1886までの精密射撃小銃は、全て非常に高精度な独立した一体型のセット・トリガーを標準装備していました。このセット・トリガーはシュミット・ルビン小銃の設計者であるSchmidt少佐が考案し、全てのベテューリ小銃のセット・トリガーに用いられました。M1886と前モデルのM1875に外観的な違いは殆どありませんが、使用弾薬がリム・ファイアからセンター・ファイアに変更されています。M1886は流石に軍用としては時代遅れであったため、その多くが国民民兵制度の延長として(国費で奨励)されていた精密射撃競技用として使用されました。スイス国内でも現存数が非常に少ない品です。



機関部後部上面にはスイス十字刻印に加えて、SIG社のフランス語名(SOC.IND.SUISSE)及びSYST.VETTERLIの刻印が入っています。

米国ロードアイランド州のプロビデンス・ツール・カンパニーが製造し、スイス軍が1867年に採用したピーボデーM1867小銃を1877年に改修した品です。トリガー・ガードを兼ねたレバーを下げる事によりブリーチ・ブロック前部が下降し、弾薬装填後にレバーを上げてブリーチ・ブロックの閉鎖を行うピーボデー・アクションと呼ばれる方式で作動します。撃発機構はサイド・ロックを流用していたため、装填操作とは別に独立したハンマーをコックアップする必要があります。スイスではピーボデー・アクションを基に、その後フレデリック・フォン・マルティニがピーボデー・マルティニ・アクションへと発展させ、後に大英帝国の主力小銃になったマルティニ・ヘンリー小銃の原点となりました。



本体(レシーバー)左側面に「PEABODY'S PAT. (一行目) JULY 22. 1862 (二行目) MAN'D BY (三行目) PROVIDENCE TOOL CO. (四行目) PROV. R.I. (五行目)」のメーカー刻印とパテント刻印が入っています。

写真の銃はすべて既刊雑誌掲載品です。

Schmidt-Rubin K11 Carbine



Schmidt-Rubin
K11 Carbine
シュミット・ルビン
K11 騎兵銃



全長 1,105mm
口径 7.5mm×55
装弾数 6発

1911年にスイス軍制式となったシュミット・ルビンIG11歩兵銃を基に、銃身長を約20cm短縮化した騎兵銃です。IG11歩兵銃では、従来のGP90弾に比べて強力な新型のGP11弾に対応する為、ロッキング・ラグの位置をボルト中間部へと移して機関部を強化した他、弾倉もマガジン・カットオフ機能を省略した装弾数6発のタイプへと変更されました。IG11の外観は、シュミット・ルビンIG96歩兵銃のストックを改修してスキャント・グリップを追加したIG96/11歩兵銃とはほぼ同様ですが、ストックとスキャント・グリップが継ぎ目のない一体型となっているのが特徴で、騎兵銃モデルのK11でもスキャント・グリップが一体構造となっています。銃、銃身長の短縮に伴う弾道変化に伴い、IG11では2,000mまで設定されていたリア・サイトの最大射程は、K11では1,500mへと変更されました。K11騎兵銃は主に騎兵や後方部隊に配備されてその軽便性が評価され、その後開発されたK31小銃の設計にも影響を与えました。



薬室上部にはブループ印に加えてスイスの十字印が打刻されています。

Maxim MG11 Heavy Machinegun



Maxim MG11
Heavy Machinegun
マキシム MG11
重機関銃



全長 1,400mm
口径 7.5mm×55
装弾数 ベルト給弾

1911年にスイス軍制式となったマキシム型の水冷機関銃で、スイス独自の7.5mm×55 GP11弾を使用します。当初ドイツのDWM社から167挺が調達されましたが、第一次世界大戦によって供給が途絶えた為、1915年からはスイスのベン造兵廠で製造が開始されました。本銃は三脚に搭載して歩兵が使用した他、車載機関銃や航空機関銃としても使用されました。また、光学照準器及びボール・マウントを装備して要塞への配備も行われました。MG11は1934年から1935年にかけて布製アモ・ベルトに代わり金属製アモ・ベルトが使用できるよう改良された他、銃口部にフラッシュ・サプレッサーが追加されました。改良型ではトリガー・システムが改良され、片手でのトリガー操作が可能となりました。MG11は1946年まで生産が続けられ、合計10,269挺が生産されたと言われています。1950年代初頭からMG51機関銃による更新が始まりましたが、1980年代に退役するまで一部で使用が続けられました。



人差し指等でセーフティ・レバーを手前に引きながら親指でトリガーを押すことにより射撃を行います。

銃身の数はすべて既知数です。

B&T APC9 Sub Machinegun



B&T APC9 Sub Machinegun
B&T APC9 短機関銃

全長 597mm(385mm)
口径 9mm×19
装弾数 15/20/25/30発



APC (Advanced Police Carbine) は、スイス・トウーンのB&T社が独自に開発した軍・法執行機関向けのシリーズで、9mm×19弾を使用する短機関銃モデルであるAPC9はオーストリアの特殊部隊コブラ等により採用されています。レシーバー上面やハンドガード側面及び下面にはピカティニー・レールが装備されており、Aimpoint Micro IIを始めたとする各種光学機器やバーティカル・グリップを装着する事が可能となっています。セレクトー・レバーやボルト・リリースがアンビタイプとなっている他、コッキング・ハンドルも左右で交換可能となっています。また、APC9では本体内部に油圧・バンプアップを内蔵する事により、体感反動が軽減されています。その他、銃口部にはMP5共用のB&T製QD (クイック・デタッチャブル) サイレンサーが装着可能となっています。ストックは複数のバリエーションが存在し、用途に応じて交換が可能です。



マガジン・ハウジング左側面にはB&T社のロゴの他、APCのモデル名や「SWISS MADE」の文字が入っています。

SIG SG551-2 Assault Rifle



SIG SG551-2
Assault Rifle
SIG SG551-2 自動小銃

全長 830mm(600mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



スイスのSIG社で製造されたSG550自動小銃のバリエーションの1つで、特殊部隊での使用を想定して開発された短縮バージョンです。ベースモデルのSIG SG550は、SG540を元に開発が行われ、試作モデルのSG541を経て1990年にSigwg 90としてスイス軍制式となった自動小銃です。SG550自動小銃は、SIG社らしい精密かつ堅牢な作りや、専用弾とスコープを使用する事により中距離狙撃銃としても使用可能な高い精度で他のアサルト・ライフルと一線を画していましたが、その反面、価格も軍用銃としては高価なものとなりました。SG550自動小銃には、二脚やライフル・グレネード用の発射機能等が標準装備されていたが、銃身を短縮したカービン・モデルであるSG551自動小銃では、これらの二脚やライフル・グレネード発射機能の他、着剣装置も省略されています。SG551自動小銃の内、現用のNATO制式弾であるSS109弾を使用するタイプがSG 551-1、米軍の旧制式弾M193弾を使用するタイプがSG551-2と呼ばれます。



レシーバー左側面にはシリアルNo.の他、「SG 551-2」のモデル名が打刻されています。

写真の銃はすべて既刊掲載銃です。

FN P90 Personal Defense Weapon



FN P90 Personal
Defense Weapon
FN P90 短機関銃

全長 500mm
口径 5.7mm×28
装弾数 50発



FN F2000 Tactical Bullpup Assault Rifle

FN F2000 Tactical
Bullpup Assault Rifle
FN F2000 タクティカル 自動小銃



全長 694mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



ベルギーのFNハースタル社が2001年に発表した、5.56mm×45 NATO弾を使用するブルパップ式の自動小銃です。本体は用途に応じて各モジュールを交換・追加出来る構造となっている他、排莖が本体前方から行われるなど、極めて特徴的なデザインとなっています。セレクターのデザインは同社のFN P90短機関銃と同様に、トリガー下に設けられたディズクを回転させる方式となっています。F2000には本体上部に1.6倍のスコープ・モジュールを標準装備するスタンダード・モデルに加え、スコープ・モジュールを省略してピカティニー・レールを延長したF2000タクティカルと呼ばれるモデルや、ハンドガードに更に追加のレールを装備したF2000タクティカルTRと呼ばれるモデルも存在します。FN F2000自動小銃は、スコベニア陸軍が2006年に制式採用して装備している他、ベルギー陸軍特殊部隊を始めとする複数の国の特殊部隊によっても使用されています。



マガジンハウジング両面にはFN社のロゴが大きく入っています。

写真の銃はすべて既刊掲載銃です。

Swedish Remington Rolling Block M1867 Rifle

Swedish Remington
Rolling Block M1867 Rifle
スウェーデン レミントン
ローリング・ブロック
M1867 ライフル



全長 1,353mm
口径 12.17mm×44RF
装弾数 単発



レミントン ローリング・ブロック ライフルは、1860年代中頃から1900年代初頭まで米国のレミントン社が製造していた後装式単発小銃です。ローリング・ブロック式の銃尾閉鎖機構は、シンプルな構造でありながら信頼性が高く、当初は黒色火薬を使用する大口徑弾用として設計されましたが、1880年以降に広まった高威力の無煙火薬にも耐え得る強度があった為、単発式でありながらも改良が続けられて長く使用されました。また、世界各国の軍隊でも採用された為、数多くのバリエーションが存在します。スウェーデンでは1867年に12.17mm×44RF弾を使用するローリング・ブロック小銃を米国から輸入し、M1867として採用しました。スウェーデン軍用モデルは、機関部がType 2と呼ばれる第二世代の古いタイプで、ブリーチ・ブロック及びハンマー・軸用の2本のピンがロッキング・スクリューと呼ばれる小型のネジによりそれぞれ本体側面に固定されているのが特徴です。



アッパー・タンクにはレミントン社のアドレス及びパテント
印刷が打刻されています。

Swedish Mauser M1896 Infantry Rifle

Swedish Mauser M1896
Infantry Rifle
スウェーデン
モーゼル M1896 歩兵銃



全長 1,260mm
口径 6.5mm×55
装弾数 5発



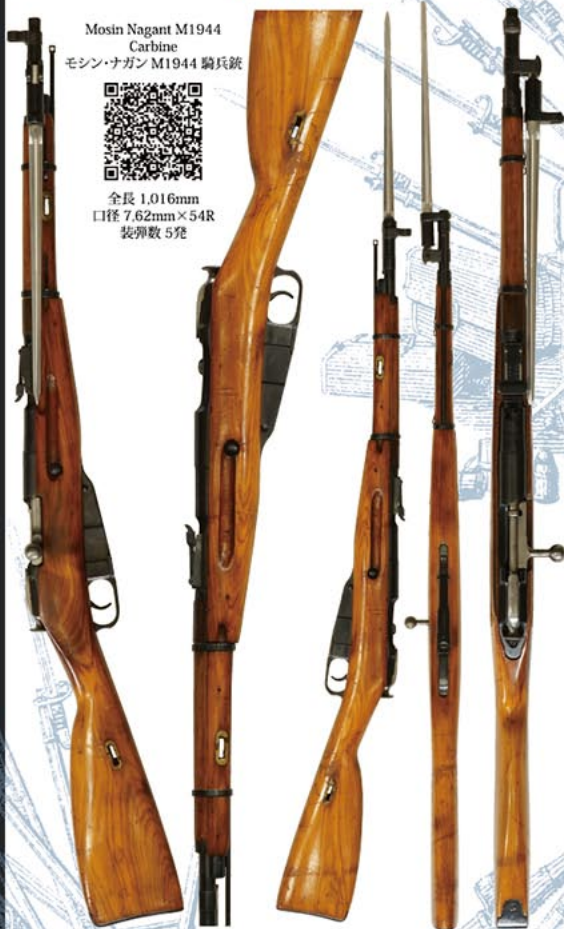
モーゼルM1893歩兵銃の改良型で、ドイツのモーゼル社からライセンス生産権を取得したスウェーデンのカー・グスタフ (Carl Gustaf) 造兵廠で1898年から1925年まで532,000挺が生産された他、モーゼル社でも1899年と1900年の2年間は38,600挺が生産されてスウェーデンに輸出されました。ドイツ帝国が採用したGew.98系小銃とは異なり、ホルト・セーフィが一世代前の形状で、ストックもグリップがないストレート・タイプになっている他、リア・サイトの形状も異なっており、Gew.98系がタンジメント・サイトであるのに対して、M1896系は起倒式のラダー・サイトになっています。また、フロント・バンド下部に一脚取り付け用の穴が設けられているのも特徴です。M1896には騎兵銃モデルは生産されず、1894年制式のM1894 騎兵銃と並行して運用が行われ、その後M1896歩兵銃の短縮型であるM1938短小銃が全軍に行き渡るまで使用されました。また、本銃をベースに4×90 AJACKスコープを装着したM1941B狙撃銃も開発されました。



本品の機身上面にはカー・グスタフ造兵廠の烙印
及び製造年を示す「1924」の刻印が入っています。
写真はすべて撮影者です。

Mosin Nagant M1944
CarbineMosin Nagant M1944
Carbine
モシン・ナガン M1944 騎兵銃

全長 1,016mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 5発

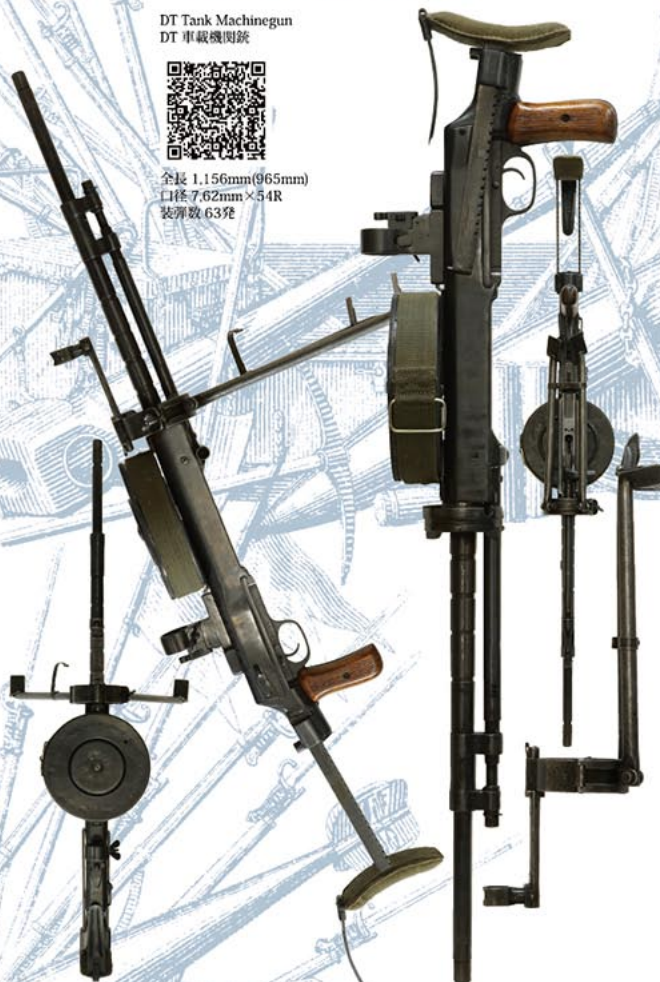


モシン・ナガン小銃は、ロシア軍大佐のセルゲイ・イワノビッチ・モシンとベルギーのナガン兄弟が設計したボルト・アクション・ライフルです。1891年にロシア帝国の制式小銃M1891として採用されて以来、様々な改良を受けながら第三次世界大戦時まで使用され続けました。M1891の改良型であるM1891/30小銃は、第二次大戦を通じてソ連赤軍の主力小銃として使用されましたが、大戦中は平原だけでなく森林や塹壕、市街地などでも戦闘が行われ、全長123cmのM1891/30では取り回しに難がありました。その為、市街戦に適した扱いやすいサイズの小銃として、1938年に後方部隊向けに採用された短縮モデルであるM1938騎兵銃をベースに、折り畳み式のスバイク式銃剣を追加したM1944騎兵銃が開発されました。M1944騎兵銃の製造は、ソ連では1943年から1948年にかけて行われ、ソ連本国のみならず戦後多くの東側諸国にも供与されました。また、戦後のM1938についても、その多くがM1944仕様へと改修されました。

写真の銃はアルミ模造刀身付きの個体で、1946年製造を示す刻印が入っています。

DT
Tank MachinegunDT Tank Machinegun
DT 車載機銃

全長 1,156mm(965mm)
口径 7.62mm×54R
装弾数 63発



DP28 軽機関銃を基に旧ソ連で1929年に開発された車載機銃で、ソ連軍の戦車や装甲車等に多数装備されました。基本的な機構はDP28と同様ですが、狭い車内で扱いやすいようストックは伸縮式となり、グリップがビストル・グリップに変更されています。また、弾倉マガジンについても直径が小さく厚みのある複列式へと変更され、装弾数が63発へと増加しています。戦車等のボール・マウントに取り付けられるよう、機関部前部にはマウントが追加され、フラッシュ・ハイターが省略されている他、降車して戦闘を行う際には、マウントに二脚とフロント・サイトを取り付け付けて使用する事も可能となっていました。その他、光学照準器や空薬莖受けを取り付けるマウントも備わっています。DP28と同じく、DTも連射時の熱によりコイル・スプリングが劣化し、装填不良や発射速度の低下が発生する欠点があった事から、1944年には改良型であるDTMが開発されました。



リア・サイトは複列式となっており、車載時にはマウント・リングに光学照準器を取り付けて使用されました。

写真の銃はすべて既刊数冊です。

AKS-74u Assault Carbine

AKS-74u
Assault Carbine
AKS-74u 自動小銃

全長 726mm
(488mm)
口径 5.45mm×39
装弾数 30/40発



RP-46 Light Machinegun

RP-46 Light Machinegun
RP-46 軽機関銃



全長 1283mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 47発/ベルト給弾



旧ソ連で開発されたAK 74自動小銃のバリエーションで、サイド・フォールディング・ストックを装備するAKS-74uをベースに、空挺部隊や特殊部隊向けに銃身長が短縮されています。銃身長が短縮に伴いライフルのピッチが変更されている他、マズル・ブラッシュを抑える為に大型のフラッシュ・ハイダーを備えています。このフラッシュ・ハイダーの内部はガス・チャンバーとして機能し、漏斗型のハイダー先端部と組み合わせる事により、短銃身でもガス・ピストンを作動させるのに十分なガス圧を確保しています。尚、通常のAK 74とは異なり、リア・サイトが最短射距離と400-500mに对应した二段切り替え式に変更されている他、銃身下部のクリーニング・ロッドが省略されています。また、レシーバー・カバーがヒンジによる開閉式へと変更されており、レシーバー・カバーを開いた際にガス・チューブ・カバーのロックが解除される構造となっているのも特徴です。

旧ソ連で開発されたDPM軽機関銃の発展型で、基本構造はDPMと同様ですが、ベルト・リンク式の給弾機構を追加し、銃身をベベル・バレル化する事により持続射撃を可能としています。この給弾機構は、射撃時に前後するコッキング・ハンドルと連動してベルト・リンクの送弾を行う構造となっており、ベルト給弾ユニットを取り外す事により従来のDP/DPM用バベル・マガジンによる給弾も可能です。尚、RP-46の本体重量はDPMを上回っていましたが、ベルト給弾とした事により弾薬運搬時の負担は軽減されています。また、ガス・レギュレーターが追加されて使用環境に応じたガス圧調整が可能となった他、分割したクリーニング・ロッドを二部に分けて収納可能とするなどの改良も見られます。RP-46は旧ソ連で1946年より配備が行われ、PK汎用機関銃により更新されるまでの約15年間使用されました。また、生産技術を受けていた各国にも輸出され、多くの紛争地で使用されました。



箱型のベルト給弾ユニットは、コッキング・ハンドルに連動してアム・ベルトの送弾を行います。

写真はすべて既刊掲載です。

Saiga 20K
ShotgunSaiga 20K Shotgun
サイガ20K ショットガン

全長 930mm(700mm)
口径 20GA
装弾数 2/5/8発



サイガ・ショットガンは、ロシア・ウズムルト共和国のイズマッシュ社がAK系自動小銃をベースに開発した半自動式のショットガンで、サイガ12 (12GA)、サイガ20 (20GA)、サイガ 410 (410GA) といった異なる口径のモデルが用意されています。作動方式はAK系自動小銃と同様のロング・ストローク・ピストンのガス圧利用方式で、ロー・テイティング・ボルト式の閉鎖機構を備えています。また、2ポジションのガス・レギュレーターを備えており、通常弾の他、マグナム弾使用時の作動性を高めています。AKと直接的な部品の互換性は有りませんが、AKベースの作動システムは他のボックス・マガジンのオートマチック・ショットガンより信頼性が高いとも言われています。サイガ20には銃身長及びストック形状の異なるバリエーションが存在し、サイガ20Kはショート・バレル及びAK-74Mタイプのピストル・グリップや樹脂製サイド・フォールディングストックを備えた法執行機関向けモデルです。



レシーバー左側面にはモデル名やイズマッシュ社のメーカー名が打刻されています。

RPG-2
Anti-tank Grenade LauncherRPG-2
Anti-tank
Grenade Launcher
RPG-2 対戦車擲弾発射器

全長 950mm
口径 40mm
装弾数 単発



1954年にソ連陸軍で配備が開始された対戦車擲弾発射器です。使用弾薬はPG-2と呼ばれるHEAT弾 (対戦車擲弾) で、黒色火薬の充填された発射薬筒により無反動砲方式で射出され、静止目標に対する有効射程は約150m、命中貫徹力は約180mmとされています。RPG-2の発射準備は、発射薬筒を装着した弾頭を発射器前部から装填し、グリップ後部に設けられたハンマーをロックする事により行います。弾頭部には飛行中の安定性を保つため、射出後に展開する6枚のフィンが設けられています。発射器本体には発射時の熱から射手を保護し、寒冷地での使用を容易にする為、木製のヒート・シールドが使用されています。照準は本体上部に設けられた折り畳み式のフロント/リア・サイトにより行いますが、1957年にはNSP-2赤外線暗視装置を搭載可能なタイプも登場しました。1960年代にソ連で後継となるRPG-7が登場すると、RPG-2は数ノ各国に広く輸出され、ベトナムや中東では実戦使用も行われました。



本品のトリガー・ハウジング左側面にはシリアルNo.の部、1956年に製造された事を示す刻印が入っています。

写真の順はすべて左から撮影しています。

Vz.58p Assault Rifle

Vz.58p Assault Rifle
Vz.58p 自動小銃



全長 845mm
口径 7.62mm×39
装弾数 30発



冷戦中に東側各国がソ連のAKを制式とした中で、チェコスロバキアは唯一独自の自動小銃であるVz.58を開発しました。使用弾薬はワルシャ条約機構加盟国の兵器・弾薬の統一を進めていたソ連の圧力によりAK-47やAKMと同じ7.62mm×39弾ですが、作動方式がショートストローク・ピストンのガス圧利用式となっている点や、ヒンジ式のロッキング・ブロックによる閉鎖機構、ストライカー式のハンマーなど、機構的にはAKと完全に異なっています。また、SKSカービンと同様に、ボルト・キャリアを後退させた状態でスプリング・クリップにより弾薬を直接上から装填する事も可能となっています。冷戦終結後、チェコではVz.58の後継としてCZ 805 Brenが開発されて更新が行われていましたが、現在でも予備兵器として保管が行われています。Vz.58にはストックの無い、Vz.58p（固定ストック）及びVz.58v（折り畳みストック）の二種類が存在する他、各種派生型や近代化改良型も製造されました。



リア・サイト・ベースの側面にはLuberský Brod工廠を示す「shc」の刻印や製造年を示す刻印が入っています。

Czech Mauser Vz.24 Short Rifle

Czech Mauser
Vz.24 Short Rifle
チェコ モーゼル
Vz.24 短小銃



全長 1,100mm
口径 7.92mm×57
装弾数 5発



1924年にチェコスロバキアでVz.98/22小銃の後継として開発されたボルト・アクション・ライフルです。ボルト等の基本構造はドイツのGew.98小銃系の流れを汲んでいます。銃身長が短縮された短小銃サイズとなっています。本銃の設計はドイツのKar.98AZ短小銃を参考に進められ、Vz.23及びその改良型であるVz.23Aを経て完成しました。後に登場したドイツのKar.98k小銃と異なり、Vz.24ではアッパー・ハンドガードがリア・サイト後方まで延長されている他、ボルト・ハンドルがストレート形状となっているのが特徴です。1920年代から30年代にかけて異なる口径のバリエーションを含むVz.24がチェコスロバキアで製造され、南米やスペイン、中華民国など世界各国に輸出されました。1939年にチェコスロバキアがドイツにより占領されると、ドイツ軍では接収したVz.24にGew.24(n)の名称を与えて使用しました。Vz.24の生産は、1942年にチェコ内工場における小銃生産がKar.98kに移行するまで占領下で続けられました。



薬室上面にはČeskoslovenská Zbrojovkaのメーカー刻印が入っています。

写真はすべて無断複製禁止です。

Polish PPS43 Sub Machinegun

Polish PPS43
Sub Machinegun
ポーランド PPS43 短機関銃



全長 820mm(615mm)
口径 7.62mm×25
装弾数 35発



「6」はボズナンのHCP製、「12」はカトヴィツェのBaidon製、「53」はワフアのWifam金属工場製です。

戦後社会主義国となったポーランドで1948年からライセンス生産されたPPS43短機関銃で、ポーランドにおける制式名は「7.62mm Pistolet Maszynowy wz. 1943」です。ポーランドにおけるPPS43の生産は、ボズナンのH. Cegielski (HCP) の他、ラドムのWaltera工場、カトヴィツェのBaidon製鋼所、ワフアのWifam金属工場で行われました。レシーバー上には各製造所を示すコードが「HCP(もしくは6)」「11」「12」「53」と打刻されています。ポーランド製のPPS43は、オリジナルのソ連製と刻印以外では基本的に同様ですが、戦後の安定した時代に生産された事もあり、オリジナルに比べて高いクオリティとなっています。PPS43は、ポーランド軍では1980年代までにAK系の自動小銃に完全に更新されましたが、その後もポーランド国内の民兵組織や鉄道保安隊等に供与されて使用が続けられました。また、PPS43をベースとしたポーランド独自の派生モデルとして、固定ストックを装備したPPS43/52や、22口径の射撃訓練用モデルも製造されました。

Wz.63 Sub Machinegun

Wz.63 Sub Machinegun
Wz.63 短機関銃

全長 585mm(333mm)
口径 9mm×18
装弾数 15/25発



ポーランドのラドム追兵隊にて開発・生産された短機関銃で、PM-63 RAKとも呼ばれます。短機関銃で一般的なボルト・システムではなく露出したスライドを備え、オープン・ボルト位置から射撃を行う独特の構造となっています。非常にコンパクトな全長でありながら、折り畳み式のフォア・グリップや伸縮式のストックを標準装備し、高い操作性を備えています。スライド先端はマズル・ブレーキを兼ねた特徴的な竹槍状となっています。セミ・フル・オートマチック射撃の切り替えはトリガーの引き方に応じて切り替え可能で、連射速度を抑える為のレート・リデュサーがスライド後部に内蔵されています。本銃は主にポーランド陸軍の特殊部隊及び空挺部隊への配備を想定して開発されましたが、東西冷戦中は東ドイツやベトナムをはじめ他の社会主義国にも輸出されました。また、中国では本銃をコピーした82式短機関銃が製造され、輸出が行われました。

写真はすべて作者撮影です。

Zastava M21S Assault Rifle

Zastava M21S Assault Rifle
ツァスタバ M21 自動小銃
スタンダード・バレル



全長 910mm(666mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 30発

Zastava M72B1 Light Machinegun

Zastava
M72B1 Light Machinegun
ツァスタバ M72B1 軽機関銃



全長 1,041mm
口径 7.62mm×39
装弾数 30/40/75発

1997年に旧ユーゴスラビア連邦共和国では、新型自動小銃の使用弾薬を従来の7.62mm×39弾から西側諸国で一般的な5.56mm×45弾へ更新する事が決定し、この5.56mm弾を使用する自動小銃の開発が開始されました。M21と呼ばれるこの新型小銃は、2004年にユーゴスラビアから改組したセルビア・モンテネグロ軍へ配備が開始され、その後もセルビア共和国軍において引き続き使用されています。ハンドガードやサイロ・フォールディング・ストックにはポリマー素材が使用されており、イスラエルのガリル自動小銃と同様に、レシーバー右側面のセレクトアーに加えて、グリップを握った状態で親指で操作可能なセレクトアーが本体左側面に装備されているのが特徴です。M21には銃身長が異なるバリエーションが存在し、スタンダードな銃身長モデルはM21S自動小銃と呼ばれます。M21は現在も7.62mm×39弾を使用するM70や7.62mm×51弾を使用するM77と共に、ツァスタバ社により生産と輸出が続けられています。



本体左側面には口径及びモデル名を示す刻印が入っています。



旧ユーゴスラビアのツァスタバ・クラグエヴァツ造兵廠で製造された、M70自動小銃の軽機関銃バージョンです。M72は旧ソ連のRPK軽機関銃に相当するモデルですが、RPKとは異なり、銃身の一部に冷却用のパレ・フィンが追加されているのが特徴です。また、ベースとなったM70系自動小銃に装備されていたレシーバーカバーの固定ラッチは省略されています。ストックは木製の固定ストックで、床部分にはM70自動小銃と同様にゴム製のパッドが取り付けられています。ハンドガードはM70自動小銃よりやや短く、側面の冷却孔は2箇所のみとなっています。M72軽機関銃はM70自動小銃と同様に改良が続けられ、初期のM70自動小銃と同様の折り出しレシーバーを持つM72の他、レシーバー左側面がフラットな形状で右側面に長方形の溝のあるM70B自動小銃タイプのレシーバーを持つM72B、M70B1自動小銃と同様にレシーバーがプレス製となったM72B1といったバリエーションが存在します。



本体左側面には「M72B1」のモデル名刻印の他、製造年を示す刻印が入っています。

写真の銃はすべて既刊誌掲載銃です。

M56 Sub Machinegun

M56 Sub Machinegun
M56 短機関銃



全長 870mm(591mm)
口径 7.62mm×25
装弾数 35発



MGV-176 Sub Machinegun

MGV-176 Sub Machinegun
MGV-176 短機関銃



全長 795mm(480mm)
口径 22LR
装弾数 161発



M49短機関銃の後継として旧ユーゴスラビアで1956年に制式となった短機関銃です。樹脂製ハンドガードやフォールディング・ストック等にドイツのMP40短機関銃の影響を強く受けていますが、コッキング・ハンドルの位置変更やバナナ・マガジンの使用、バヨネット・ラグの追加といった独自の改良も多く見受けられます。作動方式はオープン・ボルト位置から射撃を開始するブローバック方式で、ロー・ブレイムに設けられたセクター・ボタンによりセミ・フル・オートマチック射撃の切り替えが可能です。コッキング・ハンドルには、ボルトが前進した状態で本体を誤って落下させた際の暴発を防止するレバー式のロック機構が組み込まれている他、コッキング・ハンドルを時計回りに90度回転させる事により、ボルトを前進もしくは後退位置で固定するマニュアル・セーフティも装備されています。リア・サイトは100mと200mの切り替えが可能なフリップ式となっています。



レシーバー上面にはモデル名に加えてユーゴスラビア社会主義連邦共和国の国章が入っています。

ユーゴスラビア社会主義連邦共和国ヴェレニエ市のゴレニエ社により生産されていた22口径の短機関銃です。安価で反動が少なく撃ちやすい22LR弾を大量に装填可能な円盤状のマガジンをレシーバー上面に配置し、トリガー前方より下向きに排莖するレイアウトは、1960年代に米国で開発されたアメリカン180短機関銃の影響を強く受けたと言われます。しかしながら、折り畳み式ワイヤー・ストックの導入や、グリップ、レシーバーを始めとする主要部品に樹脂を多用している点など、その設計はより合理的で洗練されたものとなっており、ユーゴスラビア紛争でも広く使われました。本銃はオープン・ボルト位置から射撃を行う古典的な短機関銃ですが、単発と連射をトリガーの引き方により切り替える方式を採用しています。ゴレニエ社におけるMGV-176の製造は1970年代後半で終了しましたが、共和国崩壊後もスロベニアのオルビス社に引き継がれて生産が続けられています。



マガジン・リリース・レバーはマガジン取り付け部後方に設けられています。

写真の銃はすべて無可動複製です。

Turkish T.C. Orman Forestry Service Berthier M1948 Short Rifle



Turkish T.C. Orman
Forestry Service
Berthier M1948 Short Rifle
トルコ T.C. Orman
ベルチエー M1948 短小銃



全長 1,060mm
口徑 8mm×50R Label
装弾数 3発

Turkish M1888/05/35 Infantry Rifle



Turkish
M1888/05/35
Infantry Rifle
トルコ M1888/05/35
歩兵銃



全長 1,240mm
口徑 7.92mm×57
装弾数 5発

第二次世界大戦中に中立国であったトルコでは、ヴィシー政権が隣国イラク向けに供与したベルチエーMe1907-15小銃を主とするベルチエー小銃が流入し、数千挺を保有していました。戦後もトルコ軍はそれらを保管していましたが、使用弾薬がトルコ軍制式弾薬の8mmモーゼル弾ではなかった為、軍用小銃としての運用は出来ずにいました。その頃トルコでは、重要な輸出品であったチェルケス・クルミの違法伐採が横行し、森林の武装警備の必要に迫られていた事から、トルコ共和国森林局(T.C. Orman)の森林官用として、トルコ軍が保管していた全てのベルチエー小銃を改良して支給しました。元々のベルチエー歩兵銃は全長が長く森林での取り回しが困難であった為、銃身長が短縮され、トルコ軍が第一次大戦時に装備したモーゼルM1905騎兵銃のバレル・バンドが取り付けられました。尚、森林官は鉋剣を使用しなかった為、着剣ラゲの無いフロント・バンドでも支給はありませんでした。



薬室上部にはトルコ共和国森林局(Turkish Republic Forestry)を表す「T.C. Orman」の刻印と採用(改良)年を示す「1948」の年が刻印されています。

ドイツ軍(またはトルコ軍用)のGew.88/05歩兵銃を、1935年に当時のトルコ軍主力小銃であったモーゼルM1903/30歩兵銃に準じた仕様で改良した品です。1888年にドイツ帝国で採用されたGew.88は、特徴的な筒状の鋼板製バレル・ジャケットで銃身全体が覆われた5連発の歩兵銃で、機関部はドイツ帝国で新たに組織されたG.P.K.(ドイツ火器委員会)が設計したモーゼル式とは異なるマンリッカー式で改良型でした。1905年にはGew.88の装填方式をステアー社が特許を保有していた独特のマンリッカー・エンブロック・クリップから、Gew.98小銃と同じトリッパークリップ式へと変更したGew.88/05へと改良されました。トルコでは1920-30年代のトルコ改革に伴い、数多な外国製兵器の統一化が急務となった事から、Gew.88/05のバレル・ジャケットを収めた外に実弾部の7.92mm×57「S」弾に適した銃身への交換を行い、新たにトルコ産の良質な木材を使用したストック及びハンドガードへと交換したM1888/05/35歩兵銃が誕生しました。



左側面のレシーバー・レールに「MOD.88」の刻印が入っています。

写真の銃はすべて現存品です。

Micro Galil MAR Short Carbine (MODEL 699)



Micro Galil MAR Short Carbine
(MODEL 699)
マイクロ ガリル
MAR ショート・カービン
(MODEL 699)



全長 712mm(460mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 35発



ガリル自動小銃をベースに軍及び警察の特殊部隊や車両搭乗員向けとして開発された、コンパクトなサイズのショート・カービンです。銃身長他、ガス・ピストンやハンドガード等も短縮されています。マイクロ・ガリルには生産時期によって各部の仕様が異なるバリエーションが存在し、サイド・フォールディング・ストックは樹脂コーティングされたアルミ製の他、全樹脂製のタイプが存在します。また、レシーバー右側面のコッキング・ハンドルの代わりに、ホルト・キャリアの左側面にコッキング・ハンドルが溶接固定されたモデルも製造されています。このようなモデルでは、コッキング・ハンドルが通過するレシーバー・カバーの隙間に、バネにより開閉するカバーが取り付けられています。レシーバー左側面にはスタンダードなガリルと同様にスコープ・マウントが装備されている他、後期生産品ではピカティニー・レールが装備されたタイプも生産されました。



レシーバー左側面にはモデル名及び口径表示の他、IMI社のメーカー刻印が入っています。

Galil Sniper Rifle

Galil Sniper Rifle
ガリル スナイパー ライフル



全長 1,180mm(845mm)
口径 7.62mm×51
装弾数 10/20発



ガリルARM自動小銃を発展させて設計された狙撃銃で、ガラツ (Galatz) とも呼ばれます。通常のガリル・シリーズに比べてより高い命中精度を目指した設計となっており、ヘビー・バレルやフラッシュ・Suppressor、2ステージ・ドリフト、強化された伸縮式のバイポッド等が組み込まれています。使用弾薬は7.62mm×51 NATO弾で、射撃はセミ・オートマチックのみに限定されています。ストックはチークピースの高さやバット・プレート部が調整可能な木製バット・ストックとなっており、本体右側面に折り込む事も可能です。本体左側面に設けられたスコープ・マウントには、ニムロッド (Nimrod) と呼ばれる6倍スコープの他、夜間用照準器等の装着が可能となっています。本銃には通常のアイアン・サイトも装備されており、通常モデルのガリル自動小銃と同様に、フロント及びリア・サイトには夜光サイトも組み込まれています。



スコープは本体左側のオフセットされた位置に装着される為、通常のアイアン・サイトも使用可能です。

写真はすべて右利き用機銃です。

Micro Tavor Assault Rifle w/ Mepro21 Reflex Sight

Micro Tavor
Assault Rifle
w/ Mepro21 Reflex Sight
マイクロ・タボール 自動小銃
(Mepro21 リフレックス・サイト付)



全長 640mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



UZI Sub Machinegun, Sectionalized Model

UZI Sub Machinegun,
Sectionalized Model
UZI 短機関銃
カット・モデル



全長 655mm(470mm)
口径 9mm×19
装弾数 20/25/32発



イスラエル・ウェポン・インダストリーズ (IWI) により開発された、コンパクトなサイズのアサルト・カービンです。当初はタボールTAR 21自動小銃のバリエーションとして、マイクロ・タボールの名称で販売されましたが、現在ではX95として従来のタボール・シリーズから独立した派生モデル扱いとされています。タボール・シリーズと比較して、X95シリーズは特殊部隊向けとしての色合いが特に強いモデルとなっています。従来のタボール自動小銃とは異なるストック形状や、やや後方に移動したコッキング・ハンドル、専用サウンド・サプレッサーの取り付けを前提とした銃口周辺のデザインなど異なる部分が多く存在します。最新型ではレシーバートップ面がフラット・トップ化されて汎用性が高められており、銃身長が異なるタイプに加えて、5.45mm×39弾を使用するX95-Rと呼ばれるモデルや、9mm×19弾仕様の短機関銃モデルといったバリエーション展開も行われています。



本体左側面後部には「MICRO TAVOR」のモデル名の他、IWIのメーカーロゴが入っています。

建国後間もないイスラエルで開発され、戦後第一世代の短機関銃としては最も成功した短機関銃です。その瞬間的な火力と取り回しの良さから、イスラエル国防軍内の幅広い職種で採用され、1980年代頃まで第一線で活躍しました。システム自体は古典的なオープン・ボルトの反動利用式ですが、銃身をボルトの前半部で包み込むように配置するテレスコーピング・ボルト方式を採用し、マガジンをグリップ内に収納する事により、従来の短機関銃と比べて短く全長を実現しています。この基本設計は、1948年にチェコで開発されたSa 23短機関銃シリーズのデザインから借用した物でしたが、西側諸国でSa 23シリーズの知名度が全く無かった事も幸いし、それまでにない革新的な短機関銃として世界各国の軍・法執行機関の関心を惹き、派生モデルも含めて現在に至るまで90ヶ国以上に輸出されました。本品は新兵教育用に内部構造が見えるよう本体の一部をカットしたモデルです。

写真はすべて既刊雑誌より撮影。

Argentine Mauser M1909 Infantry Rifle, 1st Model



Argentine
Mauser M1909
Infantry Rifle,
1st Model
アルゼンチン モーゼル
M1909 歩兵銃
(1st Model)



全長 1,250mm
口径 7.65mm×53
装弾数 5発

アルゼンチン軍の前制式であったM1891小銃に代わる新型小銃として1909年に試式採用された、1900年代初頭の正統なモーゼル系ボルト・アクション・ライフルです。Gew.98小銃を基に設計されており、「Lange Vizeir」サイトが一般的なタンジェント・サイトに変更されている他、ボルト・リリースが装弾の際に使うクリップ・ガイド(左側)を兼ねているのが特徴です。このクリップ・ガイドを左後方に回すことにより、ボルト・リリースが開放されてボルトの取り外しが可能となります。M1909小銃は、1909-1912年の間にドイツのベルリンにあったDWM (DEUTSCHE WAFEN UND MUNITIONSFABRIKEN) 社により、アルゼンチン軍用として歩兵銃と騎兵銃の両モデルが合わせて約160,000挺生産されました。薬室の上にはアルゼンチンの国章が入っています。M1909小銃と同時にM1909銃剣も採用されましたが、前制式小銃のM1891銃剣との互換性はありませんでした。最初の3,000挺はドイツ製のM1909銃剣用の銃剣ラグが装備されており、M1909 歩兵銃 (1st Model) と呼ばれています。



アルゼンチン独立戦争時の、1813年の上陸演習の、記念品として薬室に入っています。

Argentine Mauser M1909 Carbine, 2nd Model



Argentine
Mauser M1909 Carbine,
2nd Model
アルゼンチン モーゼル
M1909 騎兵銃
(2nd Model)



全長 1,073mm
口径 7.65mm×53
装弾数 5発

ドイツのDWM社で歩兵銃と共に1909-1912年の間に合計約160,000挺が生産された、M1909の騎兵銃モデルです。全長の短縮化に加えて、騎兵銃ではストックがクリップの無いストレートな形状となっています。また、騎兵が背負い易くする為にリア・バンドのスリング・スイベルが左側面に移された他、バット・ストック下部のスイベルも左側面に固定されたループ状金具に変更されました。タンジェント・サイトの最大射程は歩兵銃の2,000mに対して、騎兵銃は1,400mとなっていました。騎兵銃 (1st Model) には当初銃剣装置が付いていませんでしたが、1926年には従来の騎兵銃の銃口部が僅かに延長され、M1891銃剣を装着できるように銃剣ラグが追加されました。また、バット・ストック下部にあった鉄製の固定式スリング環がバット・ストック左側面に移されています。資料によっては1926年改良型をM1909騎兵銃 (2nd Model) もしくはM1909/26騎兵銃と呼称しています。



薬室上にアルゼンチン国章、薬室左側面にスペイン語で「MAUSER MODELO ARGENTINO 1909」、同じレベルにバーレルにドイツ語で「DEUTSCHE WAFEN-UND-MUNITIONSFABRIKEN BERLIN」と入っています。

写真はすべて私が撮影しました。

Brazilian FN Mauser M1922 Carbine

Brazilian FN Mauser
M1922 Carbine
ブラジル FN モーゼル
M1922 騎兵銃



全長 998mm
口径 7mm×57
装弾数 5発



ブラジル軍は騎兵及び砲兵用として、ベルギーFN社製のM1922 騎兵銃を1922年から1924年にかけて採用しました。機構的にはGew.98小銃と同様ですが、1,400mmまでのタンジェント・サイトや下方に曲げられたボルト・ハンド、グリップの無いストレート形状のストック、小型のフロント・バンド（約12mm幅）への変更が見られます。この特徴的な小型フロント・バンドにはGew.98小銃と同じバレード・フックが付いており、フロント及びセンター・バンドの間には、両バンドを留める細い板状のスプリングが前後に2本並んでいます。リア・スプリング・スイベルはGew.98と同様の取り外し式です。FN社では世界各国軍用に多くのモーゼル型小銃を生産しましたが、MOD. 1922（1922年型）はブラジル軍用のみです。小型で取り回しが容易であった事から、現役から外れた後も武裝警察や軍の予備兵器として長年使用され、現存する品の数がかなり多い使込まれた状態になっています。



銃室にブラジル国兵、製造地（MOD. 1922、左側）と「LANGE-VIZIER」のマークが入っています。右側には「MAUSER-WERKE A.G. OBERNDORF a.N.」と入っています。

Brazilian Mauser M1935 Infantry Rifle

Brazilian Mauser M1935
Infantry Rifle
ブラジル モーゼル M1935
歩兵銃



全長 1,252mm
口径 7mm×57
装弾数 5発



ヒトラー政権下においてモーゼル社はドイツ政府の管理下に置かれ、外貨獲得のために旧式化した生産ラインを使用して製造したM1935小銃の輸出取引を押し進めました。ブラジル軍では1930年代まで第一次大戦前に輸入した旧式のモーゼルM1908歩兵銃を主力小銃として使用していましたが、操作方法が似ているという利点だけで1935年にM1935歩兵銃がブラジル軍制式となり、M1908に代わる主力小銃となりました。ブラジル共和国では1930年にイタリアン・ファシストをモデルとしたヴァルガス短事によって共和制が倒され、その後第二次大戦中にはファシスト独裁政権国として連合国に加わり、M1935歩兵銃を主力小銃として参戦しました。M1935はモーゼル社オーバーランド工場で歩兵銃と短小銃の二種類が生産されました。Gew.98小銃を基に「Lange-Vizier」サイトを一般的なタンジェント・サイトに変更しただけの旧型依然とした小銃でしたが、戦前のドイツ工業力が集約された非常に高品質の美しい品でした。



銃室上にブラジル国兵、左側面のレジャー・レーンにドイツ語で「MAUSER-WERKE A.G. OBERNDORF a.N.」と入っています。

写真はすべて撮影者所有です。

Type 64 Sub Machinegun



Chinese Type 64
Sub Machinegun
64式消音短機関銃



全長 840mm(636mm)
口径 7.62mm×25(S)
装弾数 20発

中国軍の偵察部隊や秘密警察等で使用する為に1964年に設計・開発された、消音器一体型の短機関銃です。銃口部にレシーバー先端まで完全に包み込む特徴的なサイレンサーは、米国で第二次世界大戦中にM3/M3A1短機関銃(グリースガン)にサイレンサーを組み込んで開発された消音短機関銃に近い構造となっています。ボルトとマガジン・キャッチ、セーフティ・レバー等、各部のデザインはPPSやAK、SKSカービン等から影響を受けています。作動方式はクロス・ボルトのストレート・ブローバック方式で、使用弾薬は専用設計された無音速弾である7.62mm×25(S)弾の他、通常の7.62mm×25弾も使用可能です。レシーバー右側面には発射時のボルトの作動音を抑える為、ボルトを開鎖状態でロックするレバーが装備されています。本銃はフル・オートマチック射撃も可能ですが、発射速度が1,000発/分以上と非常に高い事から、連射時には発射ガスの流れによって消音効果が低下しました。



本体左側面のセクター・レバーによりセミ・フル・オートマチック射撃の切り替えが可能です。

Type 63 Self-loading Rifle



Type 63 Self-loading Rifle
63式自動小銃



全長 1,025mm
口径 7.62mm×39
装弾数 20発

1960年代に中国が56式半自動小銃(中国製SKSカービン)をベースに独自開発した、セレクトイブ・ファイアの自動小銃です。銃身下部に折り畳み可能なスバク鉄側を備えるなど外観は56式半自動小銃に類似していますが、閉鎖機構がティルティング・ボルト方式から56式自動小銃(中国製AK-47)と同様のローディング・ボルト方式に変更されています。また、ライフル・グレネードの発射に対応する為、ガス・ブロックにガス・レギュレーターが追加されました。トリガー・ガード右側面にはフル・オートマチック射撃用のセクターが追加されており、AK-47用マガジンに類似した前照式の20連マガジンが使用可能です。また、ボルト・ストップが装備されている為、銃本体上部からのストリップ・バックリッパを用いた装填も可能となっています。結果的にSKSとAK-47の中間的な特性を持つ銃となり、特にセミ・オートマチック射撃での良好な命中精度は高く評価されました。



機関部左側面にはシリアルNo.及び「六三式」のモデル名の他、造兵廠を示す刻印が入っています。写真の刻印はすべて抜取複製です。

French Single Shot Percussion Pistol

フランスで1850年頃に製作されたと思われる、中型サイズのパーカッション式(管打式)単発拳銃です。本品はバック・アクション・パーカッション・ロック(Back-Action Percussion Lock)と呼ばれる1850年代以降のスタイルです。フリント・ロックからパーカッション・ロックへの移行期である1800年前期には、当り金(プリズン)があった名残から、ハンマーがサイド・ロック・プレート(比較的前方にありましたが、バック・アクション・ロックではハンマーが最前方に配置されました。この配置は、鉄製のサイド・ロック・プレートが本部に最も負担のかかるグリップ部分までを覆っていたことから、補強の意味でも優れていました。本品の銃身は、銃床側面を貫通するウェッジ(Wedge)と呼ばれる楔状の部品及び銃身後部から伸びるアッパー・タンクによって銃床に固定されています。銃身はダマスカス銃身で、グリップは表面に溝の彫られたフルーテッド・グリップ(Fluted Grip)になっています。



French Single Shot Percussion Pistol
フランス製 単発管打式拳銃

全長 308mm
口径 16mm
装弾数 単発



Starr Model 1863 Army Single Action Revolver

特殊なダブル・アクション式で動作するスターM1858リボルバーの動作方式をシングル・アクションのみに変更したモデルで、構造が複雑であったM1858に比べてより堅牢かつ低コストの軍用拳銃を求める米国陸軍からの要請に基づいて開発されました。M1858と同様に、シンダー後方のサム・スクリューを外すとロックが外れ、銃身及びトップ・フレーム・ストラップが前方に倒れる構造となっています。尚、銃身長はM1858アーミー及びM1858アーミーが6インチであったのに対し、M1863では8インチの銃身が装備されました。M1863は1863年から1865年にかけて約32,000挺が製造され、南北戦争中に米国政府から発注を受けた軍用拳銃としては、その納入総数がコルトやレミントン社製のリボルバーに次ぐものでしたが、民間向けの生産は極少数に留まりました。南北戦争後、多くのM1863がリムファイア仕様へと改修された為、オリジナルの管打式の状態では現存する品は海外でも希少です。



Starr
Model 1863 Army
Single Action Revolver
スター
M1863 アーミー
シングル・アクション・
リボルバー

全長 373mm
口径 .44in.
装弾数 6発



ロア・フレームには
「STARR ARMS CO NEW YORK」の
メーカー刻印が入っています。

写真の銃は教育委員会所有の「軍政博物館」に所蔵されている銃動する状態での写真です。(写真撮影はありません)

Colt Model 1860 Army Revolver



コルト社が1851年に発売した36口径のコルトM1851ネービー・リボルバーを基に、.44口径にボア・アップして1860年に発売されたモデルです。南北戦争（1861-1865）ではM1851ネービーと共に主力拳銃として使用され、総生産数約20万挺の内、12万7千挺以上が軍用として米国政府に納入されました。M1860アーミーのフレームはM1851ネービーと同サイズですが、.44口径に対応する為にシリンダー前部の2/3が肉厚となっています。その為、フレームとシリンダーの干渉を避ける目的で、シリンダー下部と接するフレームの一部が一段低く加工されています。尚、銃身長7.5インチであった極初期型を除き、M1860アーミーは銃身長が8インチのモデルのみが製造されました。本品はM1860アーミーの中でも軍用タイプの生産が終了した後のシリアルNo.50,000以降の生産品で、フレーム側面にショルダー・ストック取り付け用スクルーの無い「3スクルー・モデル」と呼ばれるシビリアン（民間向け）モデルです。

Colt Model 1860
Army Revolver
コルト M1860
アーミー リボルバー



全長 366mm
口径 .44in.
装弾数 6発



Colt Model 1855 Revolving Rifle, Early Production

コルト・ニュー・モデル・リボルビング・ライフルとも呼ばれる、コルト社が製造した初期の連発式ライフルです。機構的にはElisha K. Rootの設計によるコルトM1855サイド・ハンマー ボケット・リボルバーを拡大したもので、11径や銃身長長の異なるライフル及びカービン・モデルが各種製造されました。初期生産品の361径モデルのバレル・ロング側面には、装填後の弾丸表面に潤滑油もしくはグリスを塗布する装置が装備されていました。さらに、初期生産品では銃身に沿ってクリーニング・ロッドが取り付けられていた他、トリガー・ガード前後に指掛け用の突起が設けられているのも特徴です。尚、1855年後半に登場した.44口径モデルでは、塗油装置及び銃身側面のクリーニング・ロッドは省略されました。1855年から1864年にかけて製造された「ニュー・モデル・リボルビング・ライフル」の生産数は、全バリエーションを合わせても僅か13,000挺程度であったと言われています。



銃身基部上面には「COLT'S PT. 1855」のブランド印及び「ADDRESS COL. COLT HARTFORD CT U.S.A.」のコルト社アドレス印が入っています。



Colt Model 1855
Revolving Rifle
Early Production
コルト M1855
リボルビング・ライフル
(初期生産品)



全長 1162mm
口径 .36in.
装弾数 6発



写真は銃身基部上面の「COLT'S PT. 1855」のブランド印及び「ADDRESS COL. COLT HARTFORD CT U.S.A.」のコルト社アドレス印が入っています。写真は銃身基部上面の「COLT'S PT. 1855」のブランド印及び「ADDRESS COL. COLT HARTFORD CT U.S.A.」のコルト社アドレス印が入っています。

Burnside Model 1864 Carbine

Burnside Model 1864 Carbine
バーンサイド M1864 カービン



全長 990mm
口径 .54 Burnside
装弾数 単発

サイド・ロック・プレートには
BURNSIDE RIFLE Co.
PROVIDENCE-R.I.
の刻印が入っています。



全米ライフル協会の初代会長であり、政治家でもあったアンブローズ・エバレット・バーンサイド (Ambrose Everett Burnside) が開発した後装撃打式の単発銃です。特殊な真鍮製カートリッジを使用する事により銃尾からの発射ガス漏れを軽減している他、トリガー・ガード自体がブリーチ・ブロック開閉時の操作レバーとして機能するのが特徴です。南北戦争末期に登場した4th Modelと呼ばれる最終期型では、機関部の開閉が確実かつスムーズに行えるよう、ブリーチ・ブロックのピボット軸が2箇所に増やされているのが特徴です。また、4th Modelの後期生産型では、機関部右側面の中央にブリーチ・ブロック・ガイドとして機能するネジが新たに追加されており、従来型と容易に識別する事が可能です。この4th Model後期生産型は、別名5th Modelとも呼ばれています。バーンサイド・カービンは耐久性や信頼性が高かった為、連発銃が登場した後も根強く使用され続けました。

Spencer New Model Carbine

クリストファー・スペンサー (Christopher Miner Spencer) が1860年に開発した、後装式7連発のレバー・アクション・ライフルです。本体下部のレバーを下方に操作する事によってブリーチ・ブロックが下降し、バット・ストック内の管状弾倉から弾薬が薬室に送り込まれると同時に空薬莖が本体上部から排莖されます。尚、ハンマーの cocking 操作は、アンダー・レバー操作とは連動しておらず、別に行う必要があります。スペンサー銃は1868年にエキストラクターに改良が加えられ、この改良が加えられたモデルには「New Model」を意味する「N.M.」の刻印が銃身後部上方に打刻されています。外観上は殆ど変更がないこのモデルにわざわざ「New Model」の名称を冠したのは、1868年の時点でスペンサー銃が旧式なイメージになりつつあったのを払拭する意味合いがあったとも言われています。この「New Model」はM1868とも呼ばれ、スペンサー社が倒産する前に生産された最後のモデルとなりました。



Spencer
New Model Carbine
スペンサー
New Model カービン



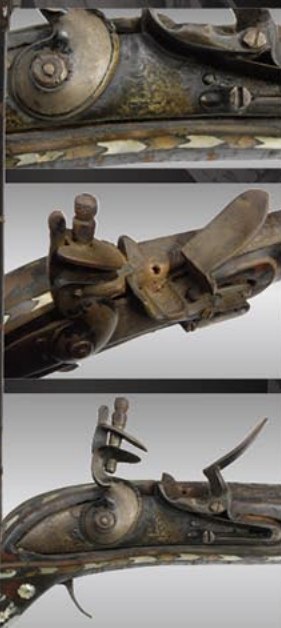
全長 945mm
口径 .56-50 Spencer
装弾数 7発

写真の銃は教育委員会発行の「明治の銃器」に付いた写真する美術の古式銃です。(真可動美術ではありません)

Jezail Flintlock Musket

Jezail Flintlock Musket
ジェザイル フリント・ロック マスケット

全長 1,322mm
口径 15mm
装弾数 単発



主にインド、中央アジア、中近東でおよそ100-200年前に遊牧民民族によって使用された前装式小銃です。成人男子がジャンピーヤと呼ばれる短剣と共にステータス・シンボルとして携帯し、宗教的な儀式に用いた他、戦いの際は軍用銃としても使用されました。アラビア半島では短剣と銃を所有する事が自由人としての誇りとしてされていました。Jezail (ジェザイル) は、バット・ストックが細長くカーブし、民族的な装飾を施された。メーカーや生産国による分類が出来ない小銃全般を指します。殆ど全てが手作りですが、フリント・ロックの機関部の製作が技術的に困難であった為、英国製や英国東インド会社製のブラウン・バス小銃から取り外した機関部を流用した品も多く見られます。独特な形状のバット・ストックは、強度を保ちつつ重量を軽減できた他、カーブした部分を前腕部に挟み込みながら騎乗中に片手で射撃を可能にする意図があったと考えられています。

Enfield Pattern 1853 Artillery Carbine, 2nd Model

主に英軍の砲兵連隊向けに製造された、エンフィールド小銃の砲兵銃モデルです。騎兵突撃からの自衛用や、敵歩兵接近時に砲を移動する際の制圧射撃用として軽量化に設計されていました。1853年制式の1st Modelでは、ライフル連隊モデルのヤタガン銃剣を着剣する為、着剣ラッグの前端が延長されているのが特徴です。また、騎兵銃のスイベル式ラム・ロッドは砲兵には不要であった為、砲兵銃では通常の着脱式となっています。リア・サイトは起倒式のリーフタイプで、100、200、300ヤードに対応していました。1858年にはクリミア戦争での経験に基づき、改良型の2nd Modelが登場しました。2nd Modelではライフルリングの深さが薬室から銃口に向かって浅くなる方式となった他、撃発を確実に行う為、より重量のあるハンマーへと変更されました。また、1st Modelで着剣ラッグ前端に設けられていた延長部分についても省略されました。

Enfield
Pattern 1853
Artillery Carbine,
2nd Model
エンフィールド P1853
砲兵銃
(2nd Model)



全長 1,020mm
口径 .577in.
装弾数 単発



Westley Richards
Breech-loading Carbine

Westley Richards
Breech-loading Carbine
ウェストリー・リチャーズ 騎兵銃
(1867年製)



「モンキー・テイル」とも呼ばれる特殊な後装撃打式小銃で、英国陸軍で前装式のエンフィールド小銃を後装式に改良するトライアルに提出された銃の一つです。本銃は構造が複雑で製造コストが高かったことから、結果的には改良が容易で安価かつ堅牢な構造のスナイデル小銃が採用されました。本銃の後装方式は、狼の尻尾（モンキー・テイル）に似たツマミを引上げることによってブリーチを開き、そこから紙薬包式の弾薬を装填します。尚、弾薬の装填操作とは別に、ハーフ・コック状態でパーカッション・ニップルに雷管を被せる必要があります。ウェストリー・リチャーズ小銃は、スナイデル小銃が制式採用されるまでモント・ストーム小銃に並び有力な候補であったが、英国陸軍省では2,000挺を購入し、騎兵用に支給しました。また、英軍の次期制式小銃の座を逃した後も、ボルトガル軍や南アフリカのボーア軍を始め諸外国の軍隊で使用されました。

全長 1,037mm
口径 451in
装弾数 単発

Wilson Capping Breech-loading
2 Band Rifle

Wilson Capping
Breech-loading
2 Band Rifle
ウィルソン 2 バンド
ライフル



全長 1,240mm
口径 577in
装弾数 単発



トーマス・ウィルソン (Thomas Wilson)
考案の後装機構を備えた施条管打式小銃です。ベースとなったのは前装式のエンフィールド小銃と同様にサイド・ロックの雷管外火式です。ウィルソン小銃の後装機構は、円柱型の遊底を前後動させて薬室の開閉を行うもので、遊底を前進させた後、側面から楔状の部品を差し込む事によって遊底の固定（閉鎖）を行います。遊底後部の把手が海老の尻尾に似ていることから、海老尻尾（英語ではFish Tail Bolt End）とも呼ばれました。ウィルソン小銃はエンフィールド小銃の後継となる英軍主力小銃を選考するトライアルに提出され、トライアルに参加した47種類の中で、最終審査まで進んだ9挺に選ばれました。しかしながら、最終的にはエンフィールド小銃からの改良コストが安く、操作が容易で堅牢性に優れたスナイデル小銃が採用されたため、ウィルソン小銃は少数が製造されたに留まりました。

写真の銃は教育委員会発行の「銃器刀剣図録」に記された可動する実物の形式です。（銃口封鎖装置はありません）

Japanese
Gunport Matchlock Musket

全長 1,514mm
口径 13mm
装弾数 単発

Japanese
Gunport
Matchlock
Musket
火縄銃 狭間筒
(無銘)



口径が通常の火縄銃（細筒）と同様の13mmですが、全長が約151cmで銃身の長い狭間筒と呼ばれる火縄銃です。軍用として徒歩で携行するには全長が長過ぎ、当時の平均身長から推測すると弾込めも難しかったと思われます。このような長銃身の品は、城の銃眼（狭間）から射撃された為、狭間筒と呼ばれました。本品の筒（銃身）は丸銃身の上面だけが平坦な形状となった丸一角で、銃口部は筋立ての施された八角柑子となっています。筒（銃身）や銃床には目釘金具や目釘穴が設けられておらず、実射時には一本の銅金（バンド）で銃身と銃床を固定しました。通常は目釘穴が位置する銃床側面には鳥を象った真鍮製の飾り板が4箇所に取り付けられており、銃床下面にも雲を象った飾り金具が付いています。その他、銃床両側面にも鳥や獅子等の装飾が見られます。カラクリは外カラクリで、引金は真鍮製の輪引金となっており、用心金は設けられていません。

Japanese Large-caliber
Matchlock Gun

口径が21mm、全長が約130cmの中筒サイズの火縄銃で、抱きかかえるようにして射撃をしたと思われます。80月中旬は口径が通常6匁（15.8mm）～10匁（18.7mm）前後で、それ以上は大筒と呼ばれる事もあります。大筒の定義は定かではありませんが、通常は砲えての射撃が不可能な50匁筒（33mm）以上の品を大筒と呼ぶようです。本品の銃身は丸銃身の上面のみ平坦な形状となった丸一角で、銃口部は筋立ての施された八角柑子となっています。銃身上面には象底により雲竜図が描かれている他、「丸に開立四つ目」の紋の象底も入っています。銃身は3箇所の目釘により銃床に固定されます。本品は在銘で、銃身下部には摂州堺の鉄砲鍛冶の一門である「芝辻長左衛門作」の銘が見られます。カラクリは外カラクリで、地板金や火扶、弾金、台締金等の部品は真鍮製となっており、派手型の引金には用心金が設けられています。銃床は飾り板等の装飾がなく、質実剛健な作りとなっています。



Japanese
Large-caliber
Matchlock Gun
火縄銃 中筒
(在銘・芝辻長左衛門作)

全長 1,305mm
口径 21mm
装弾数 単発



Japanese Matchlock Musket,
HIZEN Style w/ Inlay

Japanese
Matchlock Musket,
HIZEN Style
w/ Inlay
火繩銃 肥前
(在銘 鍛三重巻張
有吉作之進吉直、
漢字銀象嵌)



全長 1,380mm
口径 12mm
装弾数 単発

口径が12mmの細筒（小筒）と呼ばれる、狩猟用もしくは標的射撃用として用いられた火縄銃です。全長は約138cmで、火縄銃の細筒としては一般的なサイズとなっています。本品は在銘で、銃身下面に「鍛三重巻張 有吉作之進吉直」と入っています。有吉作之進吉直は、肥前（長崎住）の鉄砲鍛冶です。本品の銃身は、後方に向かってやや広がった形状の八角銃身で、銃口部は筋立てが施された芥子柑子となっています。また、先目当はタンケン形、元目当は筋割となっています。銃身は銃床に4か所の目釘金具により取り付けられており、各目釘穴には植物の葉を象った飾り金具が取り付けられています。銃身上面には「静習」と思われる漢字（刷し字）が銀象嵌により入っています。本品のカラクリは外カラクリとなっており、カラクリの地板金、雨覆、火蓋、台締金、引金といった部品は全て真鍮製となっています。引金は丸形で、真鍮製の用心金が設けられています。

Japanese Matchlock Musket
w/ Rear Sight Hood

Japanese
Matchlock Musket
w/ Rear Sight Hood
火繩銃
(在銘 柳澤定右衛門基九、
元目当覆付)

全長 1,370mm
口径 14mm
装弾数 単発

本品の全長は一般的な細筒に近い137cmで、口径は14mmと細筒と中筒の中間程度のサイズとなっています。本品は在銘で、銃身下面に「柳澤定右衛門基九」と入っています。銃身は八角銃身で、銃口部は柑子のない形状となっています。先目当はタンケン形、元目当は筋割となっており、先目当後端の粗点部分には別金具が埋め込まれた人念な作りとなっています。銃身は銃床に3か所の目釘金具により固定され、各目釘穴には梅の花弁を象った飾り金具が取り付けられています。銃床のシノギ目金具及び台かぶ部に取り付けられた真鍮製の飾り板を除き、全体に装飾などは殆ど施されておらず、質実剛健な作りとなっています。カラクリは蟹目ナキ内カラクリとなっており、カラクリの地板金、雨覆、火蓋、台締金、引金といった部品は全て真鍮製となっています。引金には用心金が設けられています。また、元目当には珍しい着脱可能な竹製の覆いが取り付けられています。



WINCHESTER

A Brief History of Winchester Lever Action Rifles

ウィンチェスター レバー・アクションライフル

ウィンチェスター社製レバー・アクションライフルの歴史は、ボルカニック・ライフル/ピストルの製造元であったVolcanic Repeating Arms社にまで遡ります。ボルカニック社の大株主であったオリバー・フィッシャー・ウィンチェスター (Oliver Fisher Winchester) は、同社の破産整理に伴い資産と特許を買取り、1857年にNew Haven Arms社を設立しました。同社はボルカニック社の設計責任者であったBenjamin Tyler Henryを雇い入れてヘンリー・ライフルを開発し、商業的に大成功を収めました。



Henry Rifle, Brass receiver Model

ヘンリー・ライフルは、後にスミス&ウェッソンを設立するホーレス・スミスとダニエル・ウェッソンらが開発したボルカニック・ライフルを改良し、より実用的にしたものです。ヘンリー・ライフルは、まだ前装式小銃が装備されていた南北戦争初期から多くの北軍兵士が自費で購入したほど先進的な小銃でした。O.F. ウィンチェスターとB.T. ヘンリーはNew Haven Arms社の経営権の帰属を巡って争い、その後O.F. ウィンチェスターは1866年に自身の名前を冠したWinchester Repeating Arms Companyを設立しました。ウィンチェスター社は共通の基本設計を持つレバー・アクションライフルのシリーズとして、Model 1866, Model 1873, Model 1876を発表し、銃器メーカーとして揺るぎない地位を築きました。しかしながら、それらはメカニズム的に強度を向上させるには限界があり、使用弾薬が限られました。その後、天才銃器デザイナーのジョン・M・ブローニング (John Moses Browning) が設計陣に加わり、Model 1886, Model 1892, Model 1894など新しいメカニズムを導入したベストセラー製品が生まれました。最後のモデルはチューブ式マガジンを廃止してボックス式マガジンを採用したM1895で、レバー・アクションの代名詞として銃砲史に“Winchester”の名を残しました。



Winchester M1866 Yellow Boy Carbine, 2nd Model

ウィンチェスター M1866はヘンリー・ライフルの発展型で、ハンドガードを追加して連射時におけるバレルの加熱問題を解決し、機関部右側面に装弾孔を設けたウィンチェスター社オリジナルの製品です。これはウィンチェスター社工場長のNelson Kingの特許によるものです。M1866は、砲金 (銅と錫の合金) 製の機関部から「イエローボーイ」と呼ばれました。



Winchester M1873 Musket, manufactured in 1894

ウィンチェスター M1873はM1866の改良型で、機関部を鉄製として強力な拳銃弾の使用が可能になり、.44-40センター・ファイア弾を使用するコルト社製のSAAと共に「西部を征服した銃」としてドル箱商品となりました。(詳細は本誌P.11参照)



Winchester Model 1876 Rifle, manufactured in 1884

ウィンチェスター M1876は、M1873を改良してライフル弾を使用出来るよう機関部を大型化したモデルです。フィラデルフィアで行われた合衆国独立100周年祭に出品されたため、「センティニアル」の別名があります。機関部が大型化された他はM1873と形状がほぼ同じため知名度が若干低いものの、セオドア・ルーズベルト大統領やアパッチ族の酋長ジェロニモの愛銃であった事で有名です。



Winchesters M1880 Takeover Rifle, manufactured in 1906

ウィンチェスター M1886は、新しく設計陣に加わったJ.M. ブローニングの設計で、内部構造が一新されました。大口径の.45-70、.45-90、.40-82 WCF弾の他、強装の.50-110 WCF弾まで使用できるモデルでしたが、1935年までに16万挺が生産されたのみで打ち切られました。伝統的なダブル・リンク・アクションを使用した機関部よりもコンパクトながら強靱な構造で、全長が長い弾薬を使用可能でした。



Winchester Model 1892 Rifle, manufactured in 1906

ウィンチェスター M1892は、M1886を改良し小口径軽量化したモデルで、.25-20、.32-20、.38-40、.44-40弾などの小口径ライフル弾もしくは拳銃弾を使用します。1892年から1945年まで100万挺以上が生産されました。



Winchester Model 1894 Rifle, manufactured in 1917

1894年に発表されたウィンチェスター M1894は、当初黒色火薬を用いる.32-40弾と.38-55弾のみのラインナップで、ライフル弾としては威力不足でした。1895年から高い堅牢性に耐えられるニッケル鋼製バレルを導入し、新たにウィンチェスター社が開発した民間市場向けライフルとしては初となる無煙火薬使用の強力な.30-30 WCF弾及び.25-35 WCF弾仕様を追加されました。更に1902年には.32 Winchester Special弾仕様に加わりました。M1894は1894年の発表以来86年間ウィンチェスター社で生産され、1980年からはUS Repeating Arms社が“Winchester”のブランド名で2006年まで生産を行いました。



Winchester Model 1895 Carbine, manufactured in 1902

ウィンチェスター M1895は、ウィンチェスター社初の (内蔵) ボックス式マガジンを持つモデルで、従来の銃身と平行に並んだチューブ式では不可能であった軍用尖頭弾 (Spitzer Bullets) を使用できる利点がありました。そのため米国を始め英国、帝政ロシアなどで軍用銃として使用され、中でもモン・ナガン小銃と同じ7.62mm×54R弾をクリップで装填可能なロシアン・モデルは約30万挺生産されました。本モデルはJ.M. ブローニングが最後に設計したレバー・アクションライフルとなり、レバー・アクション開発の歴史に幕を下ろしました。



写真の銃はM1866(登録商標) 古式銃を除き、すべて無効な銃です。

Order of the Golden Kite

功二級 金鷲勳章

功二級金鷲勳章は武功のあった将官及び佐官に授与された勳章で、106名の陸海軍将官(将軍、提督)が叙勳されました。佐官では功二級が最高位で、3名が戦死後叙勳されました。金鷲勳章は唯一軍人のみに与えられた武功勳章で、大将や自族軍人といえども相応の武功がなければ授与されませんでした。例外的に陸海軍大臣や参謀総長、軍令部総長の任を務めた場合等は授与対象となりました。功二級を叙勳されたのは日清戦争/北清事変における功で10名、日露戦争で69名、第一次世界大戦/ペリシア出兵で9名、その後昭和20年の終戦までに21名でした。日中戦争以降に受勳したのは山本五十六海軍元帥、東條英機陸軍大将など僅か15名で、大東亜戦争で金鷲勳章を受勳した軍人の総数が81万人であった事と考えると、功二級の叙勳者数の少なさは際立っています。



Order of the Auspicious Clouds

勲二位 景雲章

景雲章は1932年(大同元年)から1945年(康德12年)まで存在した満洲国勳章です。1934年3月1日の帝国勅令によって定められ、日本の旭日章と同じく国家または公共に対し勲績ある人物に授与されました。授与された期間が11年と短かった事もあり、勲二位のような高位の満洲国勳章は現存数が少なく希少です。軍人だけではなく政治、経済、文化方面等で活躍した人物が授与対象になり、勲一位から勲八位まで存在しました。勲二位景雲章叙勳者は、南満洲鉄道理事 河本大作、満映理事 甘粕正彦、蒙古聯合自治政府副主席 于品卿、晋北自治政府最高委員 夏森などの高官が主でした。日本の勳章と同じく大正造幣局で製造されました。



2019年4月1日より、弊社にて無可動実銃や登録証付古式銃を1挺お買い上げいただく毎に「ガゼットしおり」を1枚お渡しするキャンペーンが始まりました。(随順のお客様には商品と同梱してお送りいたします)。弊社発行のガゼットしおりに挟んでしおりとしてお使いいただくのに最適なサイズで、全10種類ございます。このガゼットしおりを合計10枚集めていただくと、弊社商品が20%OFFになる割引券としてお使いいただけます。詳しくは弊社HPメニューの「BookMark(ガゼットしおり)」をご参照ください。なお、将来的にはガゼットしおりを5枚集めると弊社商品が10%OFFになる期間限定キャンペーンも実施予定です。(実施決定時には弊社ブログにて告知させていただきます)。

ガゼットしおり割引に利用時の注意事項

- ガゼットしおりの譲渡・転売は無効となります。
- ※お送しする際に、しおりの種類・枚数・お客様名を控えさせていただいております。
- 割引サービスは、弊社に氏名・住所をご登録いただいているお客様のみ対象とさせていただきます。なお、割引サービスご利用時点で有効なご住所をご登録いただけない場合は、割引サービスの適用対象外となります。転居等により、弊社に登録されているご住所が現住所が変更となっているお客様につきましては、その旨をお申し出ください。
- 割引サービスのご利用は、弊社がしおりを発行したご本人様のお会計1回のみに限らせていただきます。割引適用商品はしおりの発行対象外となります。
- 銃のご購入時に割引サービスをご利用される場合は、1挺のみに適用されます。また、銃と同時にご購入されるアクセサリにも割引が適用されます。アクセサリは同一会計内であれば複数の制限なく割引が適用されます。
- 一部割引適用外の商品もございます。
- 他の割引サービスとの併用はできません。
- 複製もしくは改変、著しく汚損されたしおりはご利用いただけません。
- しおりの配布は、弊社にてしおりの在庫がなくなった時点で終了となります。
- 有効期限はございません。
- クレジットカード及びPayPalでのお支払いの場合には、割引サービスは適用されません。
- しおりのご利用条件は予告なく変更となる場合がございます。



Q: 希望商品の取り置きや店舗間での移動は可能ですか?

A: 商品のお取り置きは、通常商品が一週間、新入荷品は3日間可能で、店舗間の移動も承ります。尚、商品のお取り置き個数や店舗間の移動回数については常識的な範囲でお願い致します。

Q: 欲しい商品があるのですが、値引きはしてもらえますか?

A: 商品のお値引きにつきましては、原則としてどのお客様にも行っておりませんが、銃ご購入時にお渡ししているGazette葉(しおり)を10枚集めていると、20%割引券としてお使いいただけます。

Q: 急にお金が必要になった場合、店舗への持ち込み買取りは対応していますか?

A: 買取り品の店舗へのお持ち込みにも対応可能ですが、買取り担当者が不在の場合等は査定にお時間を頂く場合がございますので、可能な限りご来店前に事前のご連絡をお願いします。

BAAAAAAN!!

Q: アクセサリーだけの買取りは可能ですか?

A: 銃付属品や軍装品少数のみの買取りは積極的には行っておりませんが、弊社からご購入いただいた商品など、品によっては単品でも可能な場合もございます。但し、弊社査定30%保証は適用されません。

Q: 買取り用の梱包材を自宅に送ってもらう事は可能ですか?

A: 無動実銃または登録証付古式銃(長物)については、専用の箱を無料で送付する事が可能です。銃付属品や軍装品のみの場合は原則としてご自身で梱包材をご用意ください。※梱包材をお送りした際は、必ず弊社まで査定品の発送をお願いします。一定期間内にお送りいただけない場合、梱包材代及び送料を実費にて申し受けます。

買取ります!

ステップ1

まずはお電話ください。03-5818-1123

弊社よりお買い上げ頂いた品は状態が販売時と同じであれば
販売価格の最低30%を保証します。

宅配便での送品、お持ち込みどちらでもOKです。
梱包材料の無い方には専用段ボール箱をお送り致します。

ステップ2

査定をさせていただきます。

今まで弊社で査定した品のほぼ100%の商談が
成立しています。それだけ弊社の査定にはご満足
頂いております。※査定額の有効期限は1ヶ月です。

ステップ3

買取・下取り前提の査定は
無料です。お気軽にお電話ください。

即日、貴方の銀行口座にお振込致します。

**大量にある場合は
全国どこでも
出張買取致します。**

◆買取/下取りのご案内◆

買取・下取りの際は身分証明書のコピーを頂きます。ご来店の際は、必ず身分証明書(運転免許証、健康保険証、パスポート等)をご持参ください。宅配/郵送にて商品をお送りいただく場合は、身分証明書のコピーと買取代金のお振込口座情報(名義人、銀行名、支店名、口座の種類、口座番号)を明記のうえ同封してください。

●買取について

1. 弊社よりお買い上げいただいた無可動美術は状態が販売時と同様であれば無条件で販売価格の最低30%を保証し、最高200%以上で買取致します。買取価格は、種類や市場相場によって変わりますが、最近では平均50%程度です。お電話、メールでの大きな査定も出来ます。お気軽にお問い合わせください。
2. 他店から購入された品であっても、正規輸入品であれば買取可能です。他店からの購入品は現物を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束もしくは保証するものではありませんのでご了承ください。その際は購入店名(輸入業者名)をお知らせください。必ず身分証明書(運転免許証、健康保険証、パスポート等)をご持参ください。宅配/郵送で弊社へ直接送られる方は身分証明書のコピーを同封してください。
3. アクセサリー、軍用品、書籍のみの場合は買取が出来ない場合もございますので、事前にお問い合わせください。
4. 正式査定には品を宅配便でお送りいただくか、東京、大阪店へ直接お持ち込みください。梱包材料がお手元が無い方には専用段ボール箱を無料でお送り致します。尚、査定品を弊社までお送りいただく際の送料はご負担いただきます。
5. 買取が成立した後(代金の振込み後)のキャンセルは出来ません。あらかじめご了承ください。

●下取りについて

1. 下取りの条件は基本的に買取りと全く同様ですが、査定を買取価格よりも5%高く評価させていただきます。ご購入予定の品によっては10%から30%買取価格よりも高く評価出来る事もありますので、ご相談ください。
2. 下取りの代わりに購入される品が下取り品の価格より低い場合の査定は、買取価格と同額となります。
3. 下取り品の代わりに購入される品の返品は、弊社規定の返品期間内であれば他の品との交換が可能です。但し、返品してキャンセルになった場合の査定額は買取価格と同額となります。

ご来店のお客様へ

- * 弊社は世界で最も多種の小火器を展示販売している無可動美術の専門店です。一般的な品は数多くの中からお選びいただけるように、一種類につき数組ずつ在庫を用意していますので、ぜひご来店いただき、ご自身の目で品をお確かめください。希少価値の高い品につきましては一品物もございますので、遠方よりご来店の際は予めお電話で在庫状況をご確認ください。
- * 東京上野本店、大阪店ともに年中無休です。(お正月休みを除く)
営業時間は 東京店 12:00~19:30、大阪店 12:00~20:00 です。
- * クレジットカード(VISA, Mastercard, JCBとその提携カード(Amex, Dinersなど)、Nicos, Orico)を取り扱っています。(分割2回、ボーナス払いのご利用はいただけません。)
- * オリエンタルコーポレーションの店頭取決ローン(Oricoローン)も取り扱っております。ローンご希望の方は口座番号、銀行名と身分証明書(運転免許証、健康保険証等)をお持ちください。
- * 車検前検をお買い求めのお客様で簡易包装でのお持ち帰りをご希望される方には、販売価格より1万円サービスさせていただきます。(ブローニング M1919 A4機関銃など、対象外の品もありますので、お会計の前にご確認ください。)

通信販売をご利用のお客様へ

- ① お電話(TEL.03-5818-1123)、またはメール(chicago@regimentals.jp)にてご注文を受けております。
- ② 弊社HPからのご注文も承っております。まずはご希望の商品ページにある「ご注文受付はこちら」から「ご注文フォーム」をご送信ください。
シカゴレジメンタルス <http://www.regimentals.jp>
- ③ ご注文受付後、在庫を確認した上で折り返し弊社よりご連絡致します。なお無可動美術の送料は弊社でサービスさせていただきます。
- ④ お支払い方法は下記の通りです。ご送金またはご入金いただいた場合は、確認の為に必ずお電話またはメールにて東京上野本店まで早急にお知らせください。
(送品業務を円滑にするために事故を防ぐために申しこ願致します。)

◆銀行送金の場合

三井住友銀行 江坂支店 普通口座296764 名義人 株式会社シカゴレジメンタルス
ゆうちょ銀行 記号10130 番号87425981 名義人 株式会社シカゴレジメンタルス

◆現金書留の場合

〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7 (The シカゴビル)
株式会社シカゴレジメンタルス TEL.03-5818-1123

◆クロネコヤマト コレクトサービス(代金引き換え)の場合

14:00までにご注文を頂ければ一部地域を除き翌日配達が可能です。
※返品の場合は送料の他に代引手数料もご負担いただきますのでご了承ください。
(注)銀行へお振込みいただいても15:00を過ぎると翌日入金となることもありますので、その場合は翌日発送となります。

★通信販売の送料・代引手数料について

- * ご購入金額が3万円(税込)以上の場合は、送料・手数料ともにサービスさせていただきます。
- * ご購入金額が3万円(税込)未満の場合は、500円の送料をご負担いただいております。
また、コレクトサービス(代金引き換え)の場合は、送料500円+代引手数料500円=合計1000円をご負担ください。

◆クレジットカードでお支払いの場合

通信販売でも店頭とほぼ同じ各種クレジットカードをご利用いただけますが、一部ご利用いただけないカードがございますので、お問い合わせください。

◆Oricoローンをご利用の場合

通信販売でもOricoローンをご利用いただけます。簡単な手続きで分割払いが可能です。また金利もクレジットカードより低くお得です。(分割回数は、webオリコが3回~60回、専用紙記入によるお申し込みが6回~60回となります。)

◆PayPalでお支払いの場合

在庫確認後にお送りするPayPal決済用メールの内容をご確認の上、PayPal決済手続きをお願いします。

⑤ ご注文いただいた品が店頭在庫としてある場合は、ご送金・ご入金確認後、または決済完了後に宅配便にて発送致します。

* 弊社取り扱いの商品は書籍とスコープを除き全て返品が可能ですので、通信販売でも安心してご購入いただけます。もし商品にご満足いただけない場合は、商品を受け取られてから7日以内にご連絡の上、ご返金ください。お送りいただいた金額より送料、各種手数料(代引手数料・振込手数料など)を差し引いた金額を返金致します。(但し、古い品ですでの返品は常識的な回数でお願い致します。)

● ご不明な点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。

古式銃の買取り、下取りについての流れ

◇まずはご確認ください◇

1. 各都道府県の教育委員会が発行した「銃砲刀剣類登録証」が付いた合法的に所持ができる古式銃のみを買取り致します。

「銃砲刀剣類登録証」がない古式銃(例えどのように古いタイプの銃であっても)の買取りはできません。

- * 「銃砲刀剣類登録証」を紛失された方は「再交付」、新しく発見された古式銃については「発見届」から「登録審査」までのアドバイスを致します。* 「再交付」もしくは「登録証」の保証をするものではありません。
- * 「銃砲刀剣類登録証」が交付されてから弊社で買取りを行います。
- * 明治以降の品(真正拳銃に該当する物)につきましては、古くても古式銃とは見なされませんので、上記説明に沿うことはできません。

銃砲刀剣類の登録証サンプル



昭和34年交付

昭和48年交付

平成2年交付

◇ご注意ください◇

2. 稀に「銃砲刀剣類登録証」が付いていても、古式銃現物と「登録証」が一致しない場合もあります。この場合は教育委員会での「再審査」が必要となります。古式銃現物と登録証が一致しているかご確認ください。

◇お問い合わせください◇

3. 買取り可能な登録証付き古式銃であれば、お電話またはメールで、銃名(モデル名)、登録証情報、購入金額、購入時期、商品のコンディション(作動するか否か、欠品がないか)、付属品の有無、買取り希望金額をお伝えいただければ、大まかな査定が出来ます。
- また、火縄銃の場合はモデル名などがないので、写真など査定判断が出来るものをお送りください。
- まずはお気軽にお問い合わせください。

◇査定いたします◇

4. 古式銃の現物と登録証を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束または保証するものではありませんので、ご了承ください。
- 正式査定には品を宅配便等でお送りいただくか、東京、大阪店へ直接お持ち込みください。
- これから先は前ページの「無可動実銃の買取り/下取りのご案内」をご参照ください。
- * 古式銃の付属品のみのお買取りは基本的には出来ませんが、品によっては可能な場合もありますのでお問い合わせください。ただし、銃と一緒に付属品(特にオリジナル木箱など)を買取りに出される場合はプラス評価をさせていただきます。
- * 古式銃現物と登録証は必ず一緒にお送りください。

無可動実銃について

無可動実銃とは実物の銃に対して発射機能を排除する加工を海外で施し、装飾用として合法的に輸入された品です。

輸入された時期によって多少の違いはありますが、下記の加工は最低限施されているのが無可動実銃の条件です。

- * 銃身内部に鉄製のインサートが銃口から薬室まで挿入されており溶接によって抜けなくなっていること。
 - * 薬室と銃身にスリットが入っていること。
 - * 薬室は溶接によって塞がっており装填は出来ないこと。
 - * ボルトの一部若しくは半分を除去して使用不可能にし、機関部本体に溶接で固定されていること。
 - * 引き金を除く、トリガー・メカニズムの一部、若しくは全てを取り外していること。
- 平成10年以降に輸入された品はより厳しい加工が施されております。

古式銃砲について

下記の銃砲刀剣類所持等取締法第十四～十八条(抜粋)に基づき、教育委員会によって「銃砲刀剣類登録証」が交付された古式銃は合法的に所持が認められています。

第十四条 都道府県の教育委員会は、美術品若しくは骨とう品として価値のある火縄式銃砲等の古式銃砲又は美術品として価値のある刀剣類の登録をするものとする。

- 2 銃砲又は刀剣類の所有者(所有者が明らかでない場合に於ては、現に所持する者。以下同じ。)で前項の登録を受けようとするものは、文部科学省令で定める手続により、その住所の所在する都道府県の教育委員会に登録の申請をしなければならない。
- 3 第一項の登録は、登録審査委員の鑑定に基いてしなければならない。
- 4 都道府県の教育委員会は、第一項の規定による登録をした場合においては、速やかにその旨を登録を受けた銃砲又は刀剣類の所有者の住所を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。
- 5 第一項の登録の方法、第三項の登録審査委員の任命及び職務、同項の鑑定の基準及び手続その他登録に関し必要な細目は、文部科学省令で定める。

(登録証)

第十五条 都道府県の教育委員会は、前条第一項の登録をする場合においては、登録証を交付しなければならない。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を所持する者は、登録証を亡失し、若しくは盗み取られ、又は登録証が滅失した場合においては、文部科学省令で定める手続により、速やかにその旨を当該登録の事務を行った都道府県の教育委員会に届け出てその再交付を受けなければならない。
- 3 登録証の様式及び再交付の手続は、文部科学省令で定める。

(登録を受けた銃砲又は刀剣類の譲受け、相続、貸付け又は保管の委託の届出等)

第十七条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、若しくは相続により取得し、又はこれらの貸付け若しくは保管の委託をした者は、文部科学省令で定める手続により、二十日以内にその旨を当該登録の事務を行った都道府県の教育委員会に届け出なければならない。貸付け又は保管の委託をした当該銃砲又は刀剣類の返還を受けた場合においても、また同様とする。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を試験、研究、研習若しくは修理のため、又は公衆の観覧に供するため貸し付け、又は保管の委託をした場合においては、前項の規定にかかわらず、届出を要しない。
- 3 都道府県の教育委員会は、第一項の届出を受理した場合においては、速やかにその旨を当該届出に係る銃砲又は刀剣類の所有者の住所を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。

第十八条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り渡し、貸し付け、若しくはこれらの保管を委託し、又はこれらを他人をして運送させる者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、借り受け、又はこれらの保管の委託を受ける者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。
- 3 何人も、当該銃砲又は刀剣類とともにする場合を除いては、登録証を譲り渡し、又は譲り受けてはならない。

●ご不明な点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。